手前の新手術棟は本年１月から稼働中（関連記事P17）
北側には昨年完成の南病棟（７階建て）

讃樹會

平成28年２月１日発行

発行　香川大学医学部医学科同窓会讃樹會
〒761-0793　香川県木田郡三木町池戸1750-1
Tel/Fax　087-840-2291
E-mail　dousou@med.kagawa-u.ac.jp
http://www.kms.ac.jp/~dousou/
発行人　髙橋　則尋
編集人　中村　丈洋
印刷所　㈱美巧社

CONTENTS

02　第14回定期総会及び記念講演会開催のご案内
04　会長選挙及び理事選挙のお知らせ
05　会長立候補所信表明
08　就任挨拶
09　同窓生News
10　ニュースの窓
12　理事会議事録
14　新春特別対談
17　特集
　香川大学医学部附属病院手術棟の完成にあたって
20　寄稿　セレンディップの３人の王子／荻田和秀
22　研究助成金／研究奨励金　受賞のことば
24　平成28年度研究助成金応募要領
25　国外留学助成金　受賞者の言葉
26　国外留学助成金留学レポート
28　学生の短期留学報告
32　学会開催報告
34　シリーズ創部ものがたり〈ひばり〉
36　支部会･懇親会
　平成６年卒９期生／平成７年卒10期生／昭和62年卒２期生／沖縄支部会／関東支部会
46　学生ACLS勉強会活動報告
47　第36回香川大学医学部祭を終えて
51　編集後記／事務局からのお知らせ
52　診療科だより

香川大学医学部医学科同窓会讃樹會

第14回定期総会開催のご案内

日　時　：　平成28年５月28日（土）14時半より

場　所　：　香川大学医学部　臨床講義棟１階

本年は、２年に一度の総会の開催並びに会長の任期満了にともない会長選挙を執り行います。香川大学医学部医学科同窓会として更なる展開、飛躍を目指し、たくさんの方のご意見をいただきたいと思います。ご多忙中とは存じますが、会員の皆様お誘い合わせの上、多数ご出席いただきますようお願い申し上げます。

なお、やむを得ず欠席される正会員の方は、同封の委任状をご送付頂きますようお願い申し上げます。委任状を含め、正会員の十分の一以上の参加をもって、総会が成立いたしますので、ご協力宜しくお願いします。尚、特別会員、賛助会員、名誉会員、準会員の方には投票権並びに総会での議決権がございませんので、あらかじめご容赦下さい。

タイムスケジュール		
14：00〜14：30	会長選挙公開開票	臨床講義棟１階
14：30〜15：00	定期総会	臨床講義棟１階
	議題　①平成26･27年度事業報告 ②27年度決算報告 ③平成28年度予算案 ④理事会からの審議項目	
15：00〜17：00	総会記念講演会　講師　荻田和秀先生 りんくう総合医療センター産婦人科部長 「奇跡のすぐそばにいるということ 〜周産期医療を喋り倒す〜」 ミニライブ　荻田和秀ピアノトリオ	臨床講義棟２階
18：00〜20：00	懇親会	ホテルクレメント高松
20：00〜	２次会（会員に限らず自由参加）	SPEAK LOW（塩屋町）

お願い

総会・記念講演会・懇親会・２次会の出欠は、同封のハガキ、Eメール、電話、FAX等で、**３月末日までに**返信下さい。

選挙の投票締切は、返信用封筒で**５月25日まで**です。

出し忘れのないように、３月末日までに両方返信することをお薦めします。

お間違えないようにお願いします。

総会記念講演会

ミニライブ

懇親会

2次会

……

県外からの参加予定者はぜひ高松市内にホテルを確保した上で２次会３次会にご一緒しましょう。宿泊されたほうがお得です。
荻田先生も一緒ですよ。

▶今回の讃樹會記念講演会は、香川医大７期生で、りんくう総合医療センター産婦人科部長である荻田和秀先生をお招きして開催します。ちょうど雑誌「週刊モーニング」で人気連載中かつTBS系列ドラマ「コウノドリ」のモデル・監修をされたりと大変ご活躍しておられ、御存じの方も多いと思います。▶地方の周産期医療を担う人材は限られており（香川も厳しい状況です）、荻田先生には今後の産科医療をどのように継続可能なものにしていくか、これからの周産期医療への前向きな方策など（特にこれからの周産期医療を担う若い世代に向けて）、ドラマ等の制作秘話も交えてお話し頂く予定です。▶講演会の後には荻田和秀ピアノライブも開催します（同窓会初企画！）。▶その後は、ホテルクレメント高松の懇親会にぜひご参加ください。

▶２次会は、高松のジャズライブハウス「SPEAK LOW」貸切の演奏セッション大会です。演奏に覚えのある方はぜひ一緒に演奏しましょう！（各自楽器持参です。同封の返信ハガキにて演奏希望の旨をお知らせください。）そうでない方も観客として高松の夜を楽しみましょう！２次会の会場はスペースが限られており、先着50名とさせていただきます。皆様の早めの参加表明をおまちしています！立ち見になる可能性もありご容赦下さい。

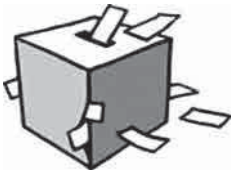
＊＊＊２次会について＊＊＊

荻田先生も所属されていた軽音部OB会を兼ねています。めったにない軽音部OB会ですのでOBの先生はぜひ積極的にご参加ください！すでに荻田先生の同級生中心に楽器持ち込みでセッション参加者が数名決定し、引き続き募集中です。伝説のあの軽音部時代の曲が聞けるかも…（３次会もあり、夜が更けるまで高松のジャズナイトを目一杯楽しめると思います～）

２次会の出欠も、総会の返信はがきでお知らせください。なお、軽音部に関係したお問い合わせは、OB会窓口の山下彩奈先生又は岡田真樹先生に直接連絡いただいても結構です。

軽音部に関する問合せ窓口：山下彩奈先生　bourjois@med.kagawa-u.ac.jp

平成28年度・29年度
会長選挙及び理事選挙のお知らせ



会長選挙

同窓会報50号（平成27年９月号）にて告示致しました会長選挙につきまして、立候補者が濱本龍七郎氏のみとなりましたので信任投票を行います。投票用紙の信任・不信任のいずれかを○で囲み、郵送または直接お届けいただきますようお願い致します。（５月25日午後５時必着）
総会開催前に選挙管理委員会が公開で開票し集計いたしますので、投票は締め切り厳守でお願いします。

理事選挙

同様に会報にて告示致しました理事選挙につき、会員のみなさまから次年度理事を卒年単位でご推薦いただきました。上位に推薦されました会員が次年度の理事候補者（別紙）となっていますので、信任投票をお願い致します。
理事選挙の信任投票につきましては、不信任の場合のみ候補者に「×」を記入下さい。（信任の場合は何も記入しないで下さい。）
こちらも同様に郵送または直接お届けいただきますようお願い致します。
（５月25日午後５時必着）

選挙管理委員会委員長　出口一志

《郵便投票方法について》

返信内容物：

① **会長選挙投票用紙**（黄色）に**記名投票**したものを小茶封筒に入れ厳封する。
② **理事選挙用紙に記名し、不信任の場合だけ「×」を記入する。**
③ **委任状に記名**する。（総会出席の場合は不要）

④ ①～③を返信用封筒で返信下さい。

投票の郵送返信締切：

５月25日（水）午後５時到着分まで有効

総会及び懇親会の出欠返信締切は３月末日です。
選挙の投票締切とは別ですのでお間違えないようにお願いします。

讃樹會会長立候補所信表明

濱本龍七郎（昭和61年卒・１期生）

香川大学医学部医学科同窓会讃樹會は30年目に入り、同窓会員も増え、母校における同窓による教授就任に前後して、全国的にも会員の先生方の目覚ましいご活躍が続いています。

この度、16年の長きにわたり会長を務めていただき、同窓会及び母校のためにご尽力いただきました髙橋則尋先生が会長職を勇退されることとなり、次期会長として、平川栄一郎副会長（香川県立保健医療大学臨床検査学教授兼学科長）、大西宏明理事長（高松赤十字病院副院長）、小川智也先生（阪本病院院長）他数名の先生に打診していましたが、現在、仕事に脂の乗り切った責任のある時期であり、協力は惜しまないが後方支援に回りたいということで固辞され、逆に私が皆さんの推薦を受け、苦渋の決断のもとに、再登板する決意をしました。

同窓会は、私ども昭和61年の一期生卒業と同時に、会員77名で何もない状態でスタートしました。30年を経た現在、2838名の卒業生が輩出され、県内で約830名、県外で約2000名の同窓生が、それぞれ医師として、臨床、研究、教育に活躍しておられ、準会員（在校生）が700名おります。全国で41名が基礎並びに臨床教授に就任し、そのうち母校においては、西山薬理学教授、正木消化器・神経内科学教授、西山放射線医学教授、木下法医学教授、横井医療情報部教授、村尾内分泌代謝・先端医療・臨床検査医学教授、日下小児科学教授、三木神経機能形態学教授、舛形総合診療医学教授、星川耳鼻咽喉科学教授、三宅歯科口腔外科学教授の11名という状況であります。讃樹會トップとして、私も責任の重いところでありますが、母校教授の先生方のお考えも拝聴し、大学並びに同窓会発展のために全身全霊を尽くす所存です。

同窓会立ち上げの頃は、初代会長として産みの苦しみも体験しましたが、お陰様で、その後順調に会も育ち、平成12年に就任された２代目会長の髙橋先生の御手腕により、安定した時期が経過しました。このように、創設、安定の時を経て、今回、讃樹會の新しい展開の時期に入ったと感じています。

これまで同窓会活動の根幹として取り組んで参りました、大学運営への協力、卒後研修センターへの協力、同窓生のプロモーションへのサポート、同窓会事業の見直しと法人化に加え、今後は讃樹會執行部の充実、大学執行部との両輪の更なる充実、看護科との連携の充実、そして全国各支部の充実に向け、これまでの旧態依然とした意識にとらわれず、広く意見を集約し、〝施策の見える化〟を目指したいと思います。医師の仕事は、極限状態の中において、二重三重のチェックをし、正確に治療したり研究したりする仕事であり、毎日ストレスにさらされています。少しでも支えとなれるよう、同窓生の母体組織として確固たる運営に当たりたいと存じます。

大学病院は地域住民の最後の砦であり希望であることを誇りに思いその責任を自覚し、経営と医術の天秤のバランスをとるために、善意による意見を持ち寄り知恵を出し合い、一丸となって病院を盛りあげていくことが大事と考えています。母校並びに母校大学病院で身を粉にして働く同窓生のために、また大勢の職員のために、更に全国の同窓のために、同窓会は協力を惜しまず、しかし折に触れ忌憚のない声を上げて共に歩む姿勢で臨みたいと思っています。また、基礎研究に力を注ぎ今後の科研費が増えることを期待しております。

今回、２期目に就任された長尾学長を始め、新年度ご就任になられます医学部長並びに病院長の益々のご活躍をお祈り申し上げます。

この度、讃樹會会長に立候補しますので、皆様の御理解、ご支援を何卒宜しくお願い申し上げます。

推 薦 状

平成28年度香川大学医学部医学科同窓会讃樹會会長に
１期生　濱本龍七郎　君を推薦します。

推薦人

（ 8 ）期生、（ H5 ）年卒　西山 成
（ 5 ）期生、（ H2 ）年卒　正木 [illegible]
（ 5 ）期生、（ H2 ）年卒　西山 佳宏
（ 7 ）期生、（ H4 ）年卒　木下 [illegible]之
（ 11 ）期生、（ H8 ）年卒　樋井 英人
（ 1 ）期生、（ S61 ）年卒　舛形 尚
（ 1 ）期生、（ S61 ）年卒　平川 栄一郎
（ 10 ）期生、（ H7 ）年卒　中村 文洋
（ 7 ）期生、（ H4 ）年卒　岡野 圭一
（ 7 ）期生、（ H4 ）年卒　土橋 浩章
（ 1 ）期生、（ S61 ）年卒　大西 宏明
（ 1 ）期生、（ S61 ）年卒　[illegible]
（ 1 ）期生、（ S61 ）年卒　小川 智也
（ 4 ）期生、（ H1 ）年卒　佐藤 清人
（ 4 ）期生、（ H1 ）年卒　松本 義人

就任挨拶

学長２期目を迎えて

香川大学学長
長尾　省吾

この度27年10月から学長２期目を迎えることとなりました。この歳で務まるか随分悩みましたが、大学改革の道半ばで手を引くのは却ってこれまでの作業を振り出しに戻すことになり、残された時間のない中、後２年で香川大学のあるべき姿を形作るのが責務と考えました。

医学部を始め相当数の他学部の方々からも応援の言葉を頂きました。ここに厚くお礼申し上げます。

さて、社会が急速に変革していく中で本学が生き残るためには、大学の質を上げ、教育・研究・社会貢献にもっとブランド力を付けなければなりません。それは近大マグロのポスターの様なステークホルダーにインパクトのある一枚のポスターではなく、長年蓄積してきた全部局の特徴・売りをもっと伸長させ際立たせることと、地域ニーズに沿った人材育成のシステムの構築にあると思っています。

皆さんもご存知のように、今、瀬戸内・四国・香川に風が吹いています。瀬戸内海や四国八十八箇所霊場と遍路路などに象徴される四国の魅力が、国内はもとより海外にもトレンドとして知れ渡って参りました。従来の香川大学を代表する研究成果をもっとアピールする作業とともに、地域ニーズの芸術文化・建築デザイン・観光など人文社会科学系の新しい人材を生み出す組織を立ち上げるべく作業を進めています。28年度中には、その詳細について社会に公表できるよう、関係部局と執行部で協議を重ねているところです。

医学部には、新たに臨床心理学科の併設を目指しており、専門チームが設置審に向け、ニーズ、カリキュラム、出口（就職先）などについて鋭意作業に取り掛かっています。新学科を発想した詳しい経緯は省略しますが、医学科・看護学科そして新たに臨床心理学科を加えた３学科として、平成30年度設置に向け関係教職員とも充分話し合い最善の努力を致します。

最近、医学部教育においても国際標準に合致した教育がなされているか、教育の質の評価がなされようとしています。医療職としての教養と専門知識は必須ですが、その上に大きな次のタスクが課せられようとしています。医学部執行部でも既に検討中でしょうが、具体的な教育計画の作成が急がれます。専門医制度の改変、地域医療への支援、そして国際化への波と、医学教育も時代の趨勢に遅れないようにと願っています。

附属病院は再開発の真っただ中であり、この時期を逸すると病院は立ちいかなくなります。病院長経験者として、病院の苦闘は痛いほど理解できます。その意味で、私の立場で出来うる限りの支援は致します。このような時期に、病院が次々と手を打って構成員一同が結束し、それを達成する事に専念して頂きたいと切に望みます。

そのような中、12月10日には新手術棟のお披露目がありました。大幅に拡張したハイブリッド手術室、ダビンチ内視鏡手術室、等10室から12室へと増設された手術室をフルに活用して地域医療の先導役として期待に応えて下さい。

同窓の方々もそれぞれの地や立場で、病める人々に真摯に向き合い、貢献していただいていると思います。患者さんは皆さんの思いやりのある温かい一言、専門職としての知識・技量を求めています。そして何よりも身も心も委ねる事のできる寛大な心を感じ取れる医療者として社会貢献をお願い致します。

私は“老骨に残りし花”（世阿弥）の心境で生きていきたいと思っています。

同窓の皆様の、ご健勝とご発展を祈念いたします。

同窓生News

北窓隆子先生（昭和61年卒・１期生）新潟県副知事ご就任おめでとうございます。

今年度は、私たち一期生が卒業して30年目にあたります。卒業式の日に当時の砂田学長がおっしゃった「君たち一人ひとりを医師にするために2000万円の国費が使われているのだから、2000万円分の貢献ができたと確信できるまでは、決して仕事を辞めないように。」という言葉は今も鮮明に覚えています。自身について言えば、まだ300万円ほど負債があるような気がします。

さて、昨年の７月に思いもかけず新潟県副知事を拝命しました。副知事は特別職の地方公務員であり、私には身にあまる重責です。各県で女性副知事の登用が進んでいるとはいえ、技術系の女性は稀です。（女性の医師である副知事は過去に遡れば数例）私が取り組んできた「保健、医療、福祉、環境」の分野を重視するという、知事から県民の皆様へのメッセージであると真摯に受け止めています。

ところで、新潟県も他の道県と違わず、深刻な人口減少問題に直面しています。明治初期には東京を凌駕する人口を誇っていましたが、平成９年の249万人をピークに現在は230万人となっています。人口減少社会は人口が少ない社会とは異なり、様々な社会システムが崩壊し、地域社会の機能が失われる危険性をはらんでいます。

さらに、新潟独自の課題として、昨年公式確認50周年を迎えた新潟水俣病、現在停止している柏崎刈羽原発、解決の目処がつかない拉致被害問題を抱えています。医師不足もしばしば取り上げられ、医療再編は喫緊の課題であるため、昨年開院した魚沼基幹病院に続き、県央基幹病院の開設に向けて関係者と協議を重ねているところです。

こうした課題はありますが、首都圏からのアクセスが良く、美味しい米、酒、野菜、肉、魚と素晴らしい自然、独自の文化に恵まれた新潟県は、燕・三条の金属製品等をはじめ大きなポテンシャルを有する県です。県内総生産額は86,068億円で全国第14位となっています。精一杯、職責（保健・医療・福祉・環境・教育・文化・危機管理）を全うし、新潟県の発展に貢献したいと思います。

振り返ってみると、私は、卒業後に母校に残らず、臨床医にならなかったのですが、折に触れて母校の先生方にはお世話になってきたことに気付きます。例えば、新潟に着任してからも、新専門医制度の講演に来県された千田先生や新潟に戻られた半藤先生（婦人科）にお目にかかる機会を得ました。また、厚労省時代には小児科から声をかけていただき、母校の小児科がかくも医薬品の小児への適応拡大に貢献されていることをはじめて知ることができました。学生時代には思いもよらないことでした。環境省在職中はアスベスト関連で佐藤先生（放射線科）にお世話になりました。PMDA在職中には原先生に声をかけていただき、K-MIXの取り組みと可能性について知る機会を得ました。衛生・公衆衛生には２年間、講師で在職させていただき、法医からは特別講義に呼んでいただきました。この間、基礎系・社会医学系の先生に大変お世話になりました。

さらに、東京に住んでいる際には、関東同窓会で同窓生の皆様と交流し、昨年、国立国際医療研究センター在職中は、坂出市医師会の松本先生や北条先生に呼んでいただき再会の機会を得ました。また、職場が女子医大の近所であったため、通勤途中で木林先生にばったり会うこともありました。エボラ出血熱対応では検疫官になった後輩の先生にお世話になりました。このように同窓生の皆様が様々なフィールドで活躍していることには、本当に勇気と元気をもらいます。東北・北陸地域でも機会があれば集いたいものです。

末筆ながら香川大学のますますの御発展と皆様の御健勝をお祈りいたします。本年もよろしくお願いいたします。　（北窓　隆子）

副知事室にて半藤先生（初代婦人科教授）と

ニュースの窓

第６回讃樹會市民公開講座　開催報告　／2015年11月14日

講師の小原英幹先生（12期生）

年に一度、市民を対象に最新の医療情報を届けることを目的に開催される讃樹會市民公開講座も第６回目を迎え、11月14日土曜日の午後、サンポート高松で開催されました。

当講座は熱心なリピーターが多く、回を重ねる度に新しい参加者も増え、あいにくの雨にも関わらず、定員100名の会場がほぼ埋まりました。

髙橋則尋同窓会長（１期生）の開会の挨拶では、当市民公開講座のコンセプトを「新進気鋭の先生による最新情報の医療講演」として紹介されました。

引き続き、座長の香川県立保健医療大学臨床検査医学教授平川栄一郎先生（１期生）により、本日の講師である香川大学消化器内科の小原英幹先生の略歴と本日の演題「消化管がんの最新内視鏡診断・治療」が紹介されました。つい先日、スペインの学会で消化器の専門家として一般講演されたことなど、ご活躍の様子も披露されました。

ご講演は、まず総論として、‘検診内視鏡における最新のNBI（Narrow Band Imaging: 狭帯域光）システムを使った拡大内視鏡の有用性’につき、胃や大腸のスクリーニング映像を例にとって市民が検診の意義がよくわかるようにお話いただきました。この最新の内視鏡は、NBIと約80倍の拡大倍率機能によって粘膜内の微細血管が強調された画像を得ることが可能な顕微鏡のようなカメラのようです。この技術発展に伴い、通常ではわかりにくいがんの早期発見やその拡がりの内視鏡診断が飛躍的に向上してきたようです。

次に各論として臓器ごとに、食道がん、胃がん、大腸がんへの内視鏡治療の説明を静止画と動画を多数紹介しつつ進めていかれました。ESD（Endoscopic submucosal dissection: 内視鏡的粘膜下層剥離術）は、日本人が開発した日本固有の匠の内視鏡手術で、臓器を温存して治癒できる画期的な治療法であるとお聞きしました。

まとめでは、最新のこれらの内視鏡技術により、検診して早期の状態でがんを発見できれば、身体に侵襲の少ない治療法でがんはなおる・怖くないというお話に参加者はとても勇気づけられました。

途中の一休みでさぬき七富士の一つである三木富士の頂上からの讃岐平野の眺望が映されました。われわれもこういったところに行って日常の疲れを癒すのも必要だなあと思いながら和やかに終始、お話を聞くことができました。講演後には、活発な質疑応答があり、参加者の関心の高さがうかがわれました。

最後に濱本龍七郎名誉会長（１期生）による締めの挨拶があり、講師と参加者に御礼の言葉が贈られ、来年の開催を約束されました。

髙橋同窓会長

平川副会長

濱本名誉会長

熱心に聴き入る参加者

香川大学医学部附属病院　平成27年度医師臨床研修マッチング結果報告

卒後臨床研修センター　センター長（専任医師）　松原　修司（平成４年卒・７期生）

平成27年医師臨床研修マッチング結果が2015年10月22日に公表され、本院マッチ者数は38名でした。標準研修プログラム（ADVANCE MANDEGAN）に36名、小児科プログラムに２名となっています。母校への想い・期待を抱いてくれた本学の35名に加え、３名の本学外出身者の皆さんが、新年度より本院臨床研修に参加予定であることを大変有り難く思っています。特に、自大出身者数は、全国国立大学病院（42施設）において第５位であり、高い評価を得ています。今回のマッチング結果となりましたことも、研修勧誘活動に対する讃樹會より継続的なご支援のお陰であり、書面をお借りして厚くお礼申し上げます。

平成18年には本院の医師確保は、どん底を経験し、当時の病院長　長尾省吾先生（現在：香川大学学長）の強力なリーダーシップの下、本院スタッフの皆さんが一致団結し、在学生・研修医の声に耳を傾け、対応に努めたことで劇的な回復を果たしました。これまで、296名が本院卒後臨床研修を修了し、その後、250名の修了者が各スペシャリストを目ざし本院診療科に入局の上、スペシャリストを目指し修練しています（図１、図２）。このように、本院の医師育成は飛躍を遂げています。また、最近は讃樹會ジュニア世代の皆さんが、本院臨床研修に参加される状況となってきており、大変心強く思っています。つきましては、讃樹會会員の皆さんのご家族・ご親戚の方々に、本院での臨床研修を是非ともお勧め頂ければ幸いです。

私は、平成18年５月より卒後臨床研修センターの専任医師を担当し、平成25年４月より本センター長を務めています。これまで９年間、微力な私ですが、現職務・医師育成を通して本院・母校の発展に貢献することを志し、猛突猛進してきました。ご支援くださった皆様に、心より感謝しています。

平成23年から再開発工事がスタートし、本院東側からの眺めは、写真のように大きく変貌しています。新病棟（南病棟）が平成26年６月30日から、新手術棟が平成28年１月４日から稼働し、平成30年には再開発が完了予定です。最高レベルの医療機器が整備され、診療・教育環境は格段と向上しています。診療および教育・研修の向上にも直結することを願っています。良医を育成することができて、はじめて地域の大学病院としての存在価値が認められると考えています。特に、本院診療科に入局した後輩医の皆さんが修得した能力を発揮し、県内の地域医療に貢献できる環境を整備する為に、戦略的に関連病院の充実を図ることが急務であると痛切に感じています。

図１　中国四国９国立大学病院
医師臨床研修マッチング者数の累計（過去10年間）

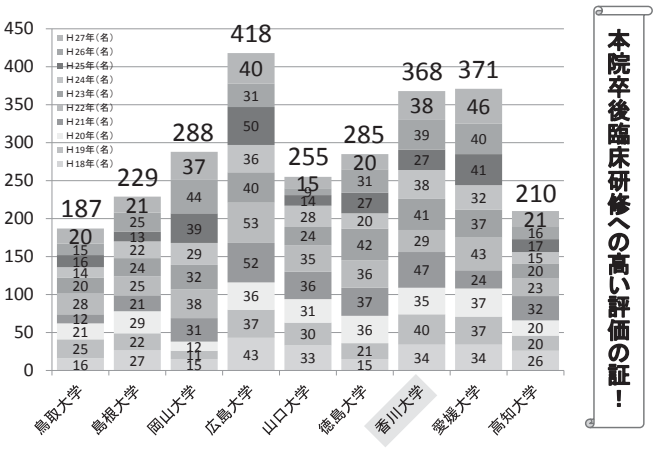
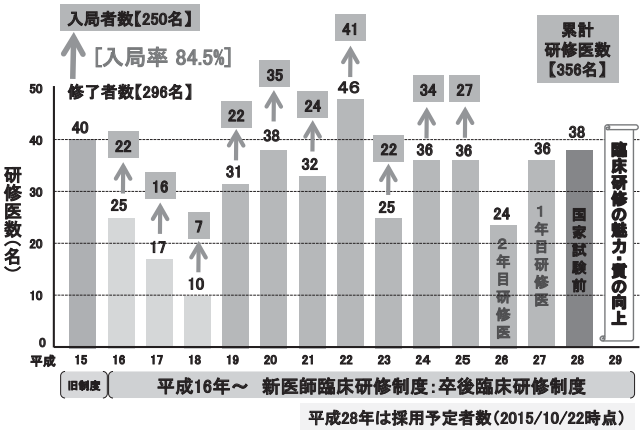


図２　本院の医師研修医数と入局者数の推移



本院・香川県の地域医療を担う多くの良医を輩出できる為に、誠心誠意努力していく所存です。今後とも、讃樹會・会員の皆様よりのご指導ならびにご支援を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

本院東側からの眺め（新手術棟と新病棟［南病棟］）

理事会議事録

平成27年度第２回理事会　平成27年12月８日（火）20：00～21：00

１．平成27年度第２回国外留学助成金審査

筒井学術局長から、申請３件の審査の前に、国外留学助成金の理事会審査方法について再検討いただくよう提案があった。昨年度の理事会で「最近の留学減少傾向を考慮して、今後、よりいい形で進んでいくように審査方法を検討してほしい」という意見があがったことを受け、具体的には、従来の２次審査方法である『理事会当日の参加理事による採点に基づいて助成額を決定する』方式について再検討が求められた。

理事会参加者による採点は、短時間で深くは見ることができないという短所があるが、理事全員が充分に時間的余裕をもって採点するためには申請書を事前配布する必要があり、個人情報保護を考慮しつつ配布する方法が難しい。又、事務局において閲覧して採点する方法も、理事の負担が大きく、殆ど機能しないと考えられる。

審議の結果、留学する会員を支援するという本助成金の意義に基づき、これまで申請件数が１回につき２件から３件であったことを鑑み、基本的な要件である一次審査基準を満たしていれば、給付金額は予算額を申請者数で割って等分して算出することとなった。但し、等分するのは申請が５件までの場合とし、６件以上の場合は、これまでの採点方式も併用して審査することとなった。申請の採択と給付金額は理事会において承認・決定されることで変わりはない。

新しく決定した審査方法を今回の申請から採用することとなり、濵本有祐先生、河口浩介先生、豊田康則先生の申請の採択と、それぞれ一律￥167,000円の助成金が交付されることが承認された。

２．平成27年度学会助成金審査

今回、２件の申請（「第25回日本意識障害学会」（申請者　香川大学脳神経外科　新堂敦先生）、「第１回日本下肢救済・足病学会－中国四国地方会学会集会－」（申請者　香川大学形成外科　岡田真衣子先生））、があり、学会助成金制度に基づき、審議された。

前者については申請が承認され、規定に基づき10万円の助成が決定した。後者については、学会会長名、及び申請者の学会における役職名を、形成外科医局に確認した上での判断とすることとなり一旦保留とされた。承認された場合、規定に基づき助成額は４万円となる。

また、筒井学術局長から、学会助成金の申請件数が徐々に増えてきている状況であるため、予算上の上限や、締切時期を決める必要が説かれ、審議された。

要項で国際学会開催の場合の支援が最大20万円と決められていることに基づき、年間予算の上限は20万円に決定された。また通常は学会開催に際して遅くとも開催の１年前にはほぼ諸事項が決定しているので、申請の時期は、開催前６か月以上とする現在のままで問題ないとして、「年一回、３月末日を締切日とする」ことを要項に追加することとなった。

３．研究助成金外部評価委員推薦のお願い

学外評価委員をお引き受けいただいている中西健先生と島田眞久先生から、業務多忙により評価委員辞退の申し出があり、来年度の学外評価委員は２名減って14名となることが筒井学術局長から報告された。臨床系の先生にもう少し多く学外評価をお願いしたいという希望が執行部会で出ており、後日、再公募することが説明された。

４．第14回総会についての日程及び記念講演会について

髙橋会長から、次年度の総会について、日程や記念講演等の計画が述べられた。

例年通り、総会、記念講演、懇親会という流れで開催し、記念講演講師として、法医学の木下先生から同窓の４期生荻田和秀先生（産婦人科医）の推薦があったことが伝えられた。産婦人科を舞台としたテレビドラマ『こうのとり』の原作漫画のモデルとなった先生であり、香川大学卒業生ということで、是非、講師に招聘したいという提案で、下交渉の段階で、日程は来年の５月28日の土曜日が候補日である。総会は従来通り臨床講義棟の１階で予定しているが、記念講演会は、荻田先生に講演とミニライブをお願いしたいということで参加者も増えることが予想され、機材の事前準備も必要であるため、会場を移動して２階で行う予定。荻田先生はジャズピアニストとして、学生時代から軽音部で非常に活躍しておられ、現在もプロとしてライブを数多くこなしておられるということで、ミニライブとしてピアノ、ドラム、ベースでのトリオ編成で演奏を企画する。理事政田哲也先生（７期生）にベースをお願いする他、ドラムを卒業生で選ぼうとしているところで、軽音部OBで見つからない場合は、外部委託を予定している。ライブのメンバー集めの件については、３期生の横井先生が請け負っていただける。外部委託の場合は、謝金として一人１万円程度が必要。音響設備等は軽音部の協力の他におそらく外部委託が必要で、経費としては、軽音部学生さんのランチ代や部への寄付、外部に関しては謝金１万円程度を予定している。講演会に関しては周知対象に、会員、大学関係者、県内の周産期関係者を予定している。講演会終了後は、懇親会（一次会）がある。更に今回は２次会として、有志による、荻田先生を囲んでのセッションを予定。演奏への参加及び聞くだけの参加もありで、会員に限らず誰でも自由参加とする。

尚、翌日、荻田先生は高松市行政が開催する瓦町フラッグ８階における市民公開講座でご講演される予定で、その関連もあり高松市保健所の藤川愛先生（16期生）に、当会の記念講演やミニライブ及び全般の企画構成に関して大いにご尽力いただいており、荻田先生を始め様々な関係者、関係各所への連絡等を全面的に引き受けていただいている。

新春特別対談

河野雅和先生　退官を迎えて

循環器・腎臓・脳卒中内科学教授　**河野雅和先生**
讃樹會名誉会長　**濱本龍七郎**

濱本　香川大学医学部循環器・腎臓・脳卒中内科学教授河野雅和先生は、本年３月31日をもって定年退官されます。平成12年４月１日に香川医科大学内科学第二講座の教授として着任以来、河野先生には、同窓会としても、私個人的にも非常にお世話になりました。その感謝の意を込めて、会報企画として初めてとなりますが、「退官を迎えて」ということで対談の場を設けさせていただきました。教授ご就任からの16年間を振り返り、いろいろなお話をさせていただいて、今後の参考にさせてもいただくし、讃樹會会員のみなさんに会報でお知らせしたいと思っております。

河野　ありがとうございます。大阪市大出身の教授は香川大学では、薬理学教室の安部先生がおられましたが、臨床系は私１人でしたし、安部先生もしばらくして退官されましたから、濱本先生のご尽力で、香川大学の先生方とも仲良くしていただけるようになり、仕事上でもプライベートでも活力の源になりました。また、いろいろサポートしていただけて本当に良かったですし、感謝しております。私が就任したのが2000年ですが、濱本先生もちょうど同じ年に病院を開業しておられますね。

濱本　たまたまですけど、ちょうど2000年の同時期ですね。あれはやっぱり不思議な縁ですね。

河野　“たまたま”は大事なことです（笑）。偶然の出会いを大切にしたいですね。一期一会の気持ちで誠意を尽くすことが成功の秘訣ですね。

濱本　一口に16年といっても結構長いのですが、16年の教授生活をご自身で振り返られてどうでしょうか？

河野　もしも私が香川医大の教授になっていなかった場合どうなっていたかというのを比べれば一番わかりやすいかと思います。たぶん、大阪の中央区の本町で２代目として継続開業していたと思います。

濱本　そうなのですか。

河野　香川に住み、それよりもはるかに私の世界が大きく広がりました。海外への出張といった学会レベルの広がりもありますけれども、それ以上に香川県内でいろいろな先生方にめぐりあうという人の面の広がりとか、学術活動の面とか。もっと小さな範囲で終わっていたものを、香川医科大学、香川大学で広げていただきました。

特に長尾病院長の時に副院長になって、評価と広報と再開発の担当が続きましたが、それが今後の大阪での活動にも大変役立つと思います。

濱本　副病院長は2004年から７年間就任されたのですか？

河野　そうです。再開発担当もしておりました。いうなれば新病棟の骨格の着手ですよね。現学長の長尾先生の舵取りで、ナンバー内科、外科を全て止めて、病棟も外来も臓器別機能別に変えていきました。あれだけ大掛かりな再開発であれば当然経営も大変ですが、20年後、30年後を見据えたものであり、現在もみなさん、力を合わせて取り組んでおられます。循環器・腎臓・脳卒中内科に関連しては、平成26年より新病棟３階にCCU併設の心臓血管センターが開設されました。外科と内科の区分けが全くない心臓血管センターが生まれました。

更に、一時、脳卒中協会と、高血圧協会と慢性腎臓病（CKD）の３つの香川県支部長を同時に務めていて大変多忙でした。

濱本　先生がこちらに来られて一番インパクトのあっ

たのは、やはり人との出会いに尽きますか？

河野　はい、想像以上に人のつながりが広がりました。いろいろな人との出会いがあり、中には合わない人も当然いましたし、教室員も私の事を100人中100人全部が良かったということはないと思いますが。けれども、現在、多くの教室員が香川県内外の中核病院へ、病院長、副病院長、部長、センター長などをして活躍しております。循環器腎臓脳卒中内科は守備範囲が幅広いので、それが魅力的ではありますが、運営は大変です。

濱本　2004年から卒後臨床研修医制度が始まって、時代も大きく変わってきましたね。

河野　そうですね、研修医制度で、大学病院より大きな都会の公的民間病院に人が集まりました。昔は大学に残ることに何の疑いもなくて、入局面接で大学で断られたら、結構ショックというかんじでした。

濱本　ご略歴を拝見しますと、大変スマートでびっくりするようです。

河野　確かに、いわゆる臨床病院へ長期で行ってはいません。卒業後も、ずっと大学にいて、出向は外国への留学が２回だけでした。

濱本　大学院を終わってすぐに助手になられて留学されて、39歳で専任講師になられていますね。

河野　昔は講師といえば学内講師はなくて、専任講師しかなかったです。略歴には入れていませんが、24歳で大学を卒業し専任講師になるまでに、海外の大学以外に、広島大学の生理学研究室へ１年間勉強に行かせてもらったりしました。

濱本　留学された時に、そんなに仕事をしなくてもいいですよって言われるくらい仕事をされていたとお聞きしました。

河野　「You are sick !」と言われるくらいしましたね。中国やインドからの留学生との競争が激しく、ちょっと出遅れたら出し抜かれてしまうからです。その勢いのままに帰国しました。

香川大学出身の母校教授は今11名おられますが、香川大学も開講30年を過ぎましたから、卒業生が重要な役職に当たる年齢となって、公的病院の病院長や母校を始め全国的にも教授が増えていることと思います。いかがですか。

濱本　全国の基礎並びに臨床教授は41名います。

河野　41名はすごいですね。私も2000年から16年、香川医科大学出身の教授が大きく増えたことに貢献できたことを誇りに思います。益々、香川大学教授が増えて、学生も、若手医師もみんな母校のために頑張ろうという母校愛を持っていただきたいと思います。皆様が夢を持たないと、モチベーションが続きません。若い先生には“Big Dream”をもってほしい。

やはり、夢がないと、日々の辛い労働が更に厳しく思われます。現在の若い医師の先生方は、仕事がハード過ぎます。少し、診療から研究の方向性を考える余裕がほしいですね。

濱本　厳しい仕事ではあります。内科は特にね。

河野　若い先生の中には消耗している人もいて、海外の大学への留学が決まると結構ほっとしていますね（笑）。

今回、助教の先生のスタンフォード大学への留学の道筋をつけました。これは私の最後の仕事です。これを縁に、代々、優秀な人を３年ごとぐらいに送っていくというシステムを作りたいですね。ローカルユニバーシティとして地域医療に貢献することに加えて、やはりスタンフォードとか、ハーバードにも留学できる道というのをつけておかないと学生は集まりません。小豆島の地域医療に貢献することと、世界に羽ばたいてスタンフォードやハーバードに行くことの両方が重要であると思います。

濱本　在任中に、人事面で、教授職６名、循環器内科部長５名、腎臓内科部長５名、病院長・副病院長５名のかかげていた数値目標を早々と達成され、突破されましたし、研究面ではインパクトファクター1000点（前大学のIFを含めて）を目標としていましたが早い段階で達成され、今や1500点を越えておられます。

諸先輩や医局員をはじめとして、様々な交流から、先生の世界は、香川だけでなく中四国全体、更に世界中に広がり、いろいろ経験もされ、若い医局員を国内の北海道大学とか慶応大学はもとより、世界中に派遣され、みなさん非常に喜んでおられます。先生、16年間、本当に良かったと思えます。

河野　非常に良かったですよ。濱本先生と会えたし、それ以外の香川大学卒業生も西山先生を含めていろいろみんなとお友達になって、医局員も協同で起業して病院をつくりそのお祝いに講演したり。いろいろな意味で大変良かったと思います。

濱本　先生はご趣味も多く、写真や絵画、ヨットも得意でいらっしゃって、そういう出会いも多いですね。

河野　香川大学の医師会会報２月号の表紙に、冬の蘭園というタイトルで私の写真が使われるので見て下さい。

濱本　実は私は、医学部茶道部初代部長で、隠れ趣味でお茶をしています。ただ、水泳部、ヨット部、囲碁将棋、軽音、なんでも入っていました、最初の頃は。

河野　それは初めて伺いました。

濱本　お茶はいいですよ、是非お勧めします。先生が退官され香川を離れられるのは、私にとっては非常に淋しい限りです。16年間、先生との出会いから今に至

るまでを振り返り一言で言うなら、「河野先生は、愛すべき教授でした」、これに尽きます。

河野　本当にいろいろ思い出がありますね。でも、年に１～２回ですが、今後も香川に非常勤講師で参ります。

濱本　先生の最終講義には病院を抜け出してでも駆けつけたいと思います。

河野　最終講義は、講義というより、香川医科大学、香川大学16年を振り返ってというタイトルで面白い話をちりばめて本音の話をしたいですね。

私も、香川に来て視野が広がって、井の中の蛙が広い世界に出ることができ大変感謝しております。学会で最優秀賞を獲得した医局員からは「先生で人生が変わった」と言ってもらいました。若い人には、それぞれ、国内外の優秀な施設に出て行って頑張るように言ってきました。大きな夢を持って努力したら必ずいつか報われます。全員がそうなるわけではないけれど、大きな夢を持ち続けて努力し続けた人が結果的にそうなっています。濱本先生、お互いの今後の夢を次回は語り合いましょう。（笑）

教室の若い先生方へのメッセージ

I want to encourage young doctors of our department to have “**Big Dream**” and keep pursuing them. Your dreams will surely do **come true** someday !

Department of CardioRenal and CerebroVascular Medicine
Masakazu Kohno, MD, PhD

特集

香川大学医学部附属病院手術棟の完成にあたって

香川大学医学部附属病院 副病院長（再開発・広報担当）
香川大学医学部附属病院 麻酔・ペインクリニック科 教授
白神豪太郎

香川大学医学部附属病院「手術棟」が病院再開発整備計画の第２期工事として着工完成し、平成28年１月４日から運用を開始いたしましたのでご報告いたします。第１期工事としては南病棟がすでに完成し、2014年６月30日から運用を開始しています。

手術棟は、鉄筋コンクリート造り、免震構造４階建て、既存の中央診療棟および南病棟と渡り廊下で連結されています（図１，２）。同じく免震構造の南病棟とあわせ、大規模災害時にも診療を継続できるように設計されています。１階に放射線部、２階に材料部、３階に手術部を配置し、４階は機械室になっています。延べ床面積は約5,500㎡、工期は平成26年８月26日から平成27年10月30日まででした。

手術棟１階は放射線部です（図２）。放射線部機能の一部を既存中央診療棟から手術棟１階に移転し、放射線部が既存部分とあわせて拡充されます。現在進行中の中央診療棟改修工事は診療を継続しながらの改修（「居ながら改修」）となっており、そのため、診療機

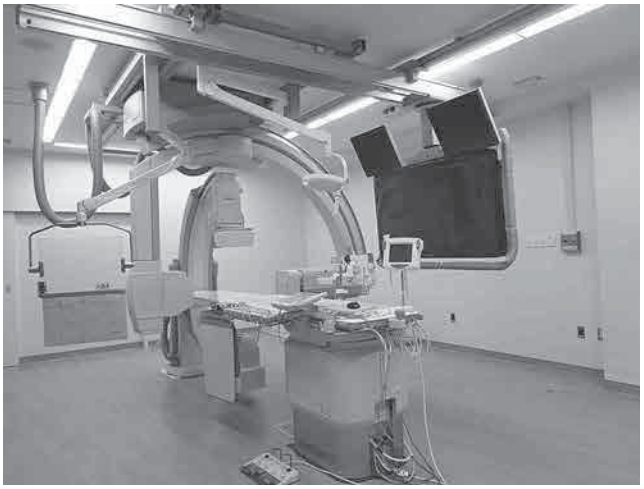


図３　１階放射線部心血管撮影室

図１　手術棟全景

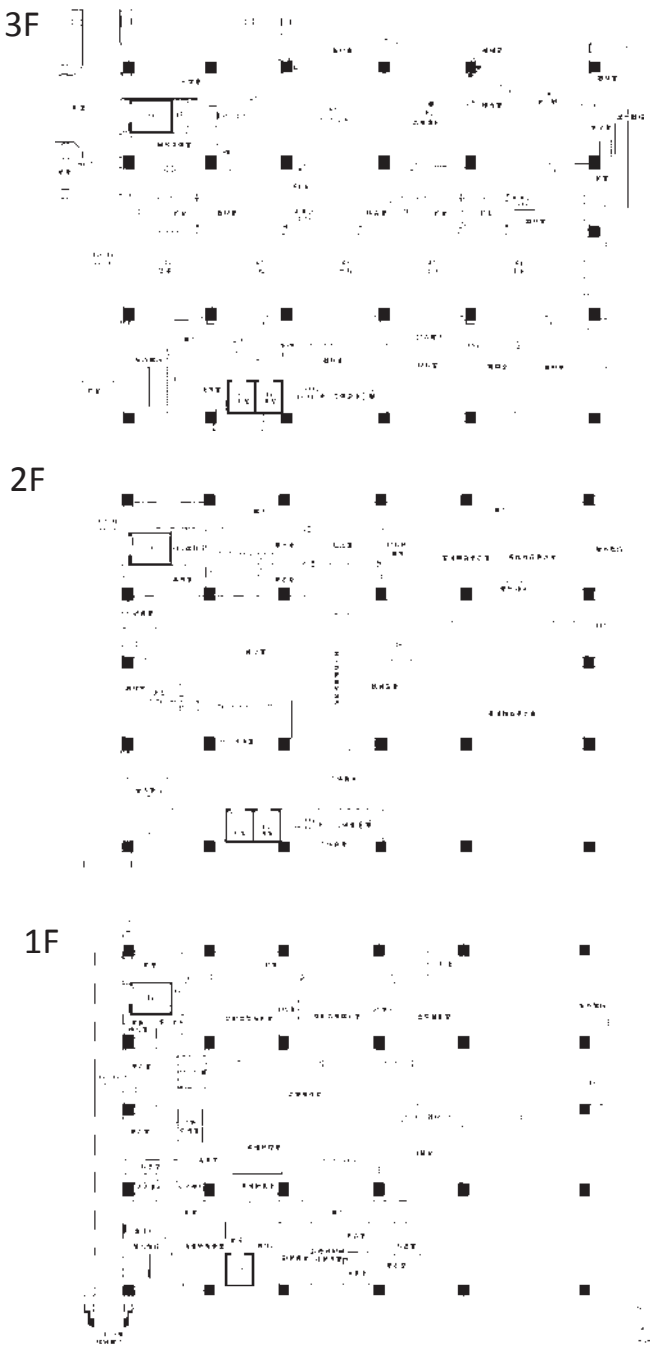


図２　手術棟平面図

能の一部をまず移転させ、その空いた部分を改修するということを繰り返していくことになります。手術棟１階への放射線部の一部機能の移転は「居ながら改修」に必須の工程になっていました。手術棟１階には頭部血管撮影室、腹部血管撮影室、心血管撮影室が設置されています。心血管撮影室には手術棟開設にあわせて最新装置が導入されました（図３）。今後、既存中央診療棟改修に伴って、頭部血管撮影室と腹部血管撮影室に装置が移転され、順次稼働となります。

手術棟２階は材料部です（図２）。材料部は中央診療棟３階から全面的に移転、拡充されました。新材料部は３階手術部の直下に配置され、専用エレベータ（２台）と立体倉庫で手術部と連結されています。手術で使用された物品や器材は使用済み器材専用エレベータで材料部に下ろされ廃棄、または洗浄、消毒、滅菌の後、立体倉庫に保管され手術部に供給される、あるいは滅菌器材専用のエレベータで手術部に上げられます（図４）。清潔物品と不潔物品が分離され、交錯しないように設計されています。

図４　２階材料部立体倉庫

手術棟３階は手術部です（図２）。手術室８室が新たに設置されました。OP室１は一般手術室ですが、ロボット（ダ・ヴィンチ）手術が余裕をもって可能な十分な広さをもった手術室になります（図５）。現在、ロボット手術は前立腺癌手術が保険適応であり当院でもルーチンで行われていますが、今後、消化管、肺、心臓、婦人科手術などの多くの手術へ応用されていきます。OP室２はハイブリッド手術室です（図６）。最新のX線透視・血管造影装置と専用手術台を設置し、血管内手術に対応します。血管内手術は従来の開胸、開頭あるいは開腹など大きな侵襲を伴うような手術と比較して低侵襲であり、近年急速に発展しています。主に心臓・血管手術や脳・脊椎手術が対象ですが、今後様々な低侵襲手術に応用されていきます。OP室２では通常の手術台を使用することにより血管内手術以外の一般手術も可能です。OP室３はMRI手術室です（図７）。術中MRI撮像を可能とすることで、腫瘍・病変の位置へ正確に到達できたか（ナビゲーション）、病変のとりのこしなく手術が達成できたか（高い根治性）、機能が温存できたかなどの診断が可能で、また合併症の早期発見に役立ちます。主に脳腫瘍手術が対象となりますが、整形外科、耳鼻咽喉科手術などへも今後応用が拡がっていくものと思われます。OP室４と５はバイオクリーン手術室（BCR）です。体内への人工物（人工関節などのインプラント）植込み、骨髄採取、臓器移植などの感染対策が重要な手術・手技が対象です。旧手術部にはBCRが１室のみでしたが、

図５　３階手術部OR1（ロボット手術対応手術室）

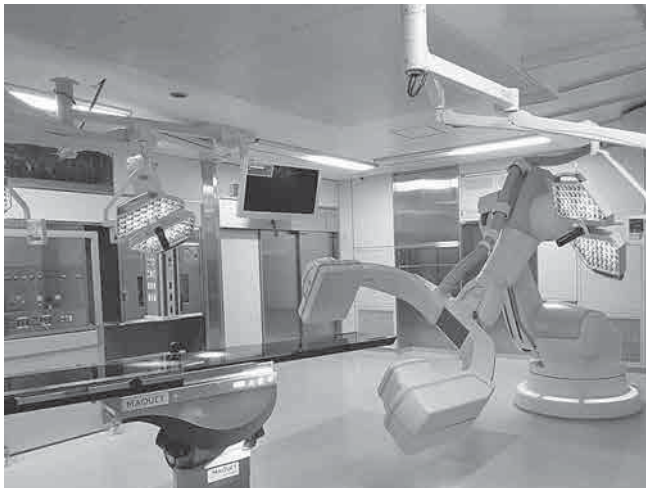


図６　３階手術部OR2（ハイブリッド手術室）

図７　３階手術部OR3（MRI手術室）
奥に見えるのが手術用MRI。点線が５ガウスライン。

２室とすることで柔軟な対応が可能となります。OP室６と７は一般手術室ですが、諸種の内視鏡手術に対応可能になっています。内視鏡手術は近年非常に発達し、低侵襲でもあり、今後も手術件数が増加していくと思われます。OP室８は陰圧陽圧可変の手術室で、感染疾患患者対応用です。空気感染する疾患（結核、水痘、麻疹、SARSなど）を有する患者さんでは、感染拡大を防ぐため陰圧で手術を行います。内部設備は内視鏡手術可能な一般手術室と同じです。通常の手術では、その他の手術室と同様、外部からの病原体の侵入を防ぐため、手術室は陽圧とします。OP室１～８いずれの手術室も、狭隘化してしまった従来の手術室に比べて広くなっています。

３階手術部には、新たに麻酔準備室と麻酔後回復室を整備しました（図２）。手術室を手術以外（例えば、神経ブロックや中心静脈カテーテル留置、病棟帰室までの待機など）に使用する時間をできるだけ短縮し、通常勤務時間にできるだけ多くの手術をこなすことで、手術室回転効率を上昇させ、超過勤務を削減（労働環境を改善）することが主要目的です。副次的なものとして、麻酔準備室の使用により研修医・専攻医への教育時間を十分にとることができる、麻酔後回復室の使用により、術後早期合併症（術後痛、術後悪心嘔吐、循環動態不安定、呼吸抑制、術後出血など）への迅速な対応が可能となり、不十分な回復状態で患者を病棟へ直接帰室させる危険性が減少し病棟看護師の負担が減るなどがあります。ただし、既存中央診療棟改修終了まではこれらの機能は使用できません。

OP室３～８間には回収廊下を設置し、物品の効率的運用をはかりました。空調設備にも工夫が施されています。旧設備では執刀医に快適な空調温度設定では患者さんの体温が低下しがちでしたが、新設備では執刀医と患者さんへ向かう空気温を別々に設定することで両者に快適となるようになりました。

手術部は新手術棟の完成により拡充されましたが、新手術棟のみでの運用は不可能で、既存中央診療棟とあわせての運用になります。新手術棟には更衣室、受付あるいは職員控室などの機能はなく、これらは既存部分の機能となります。今年度から、既存部分の改修が順次行われます。工事完了後は、手術部は現在の手術室10室から12室になります。中央診療棟改修終了の平成30年度末まで、手術部の機能には一部制限がかかり、工事が絶えることがありません。讃樹會の皆様には大変ご迷惑をおかけ致しますが、ご理解とご協力のほど何卒よろしくお願い申しあげます。

寄　稿

５月の定期総会で荻田先生の記念講演が決定!!荻田先生を中心にミニライブも同時に開催します♪

『セレンディップの３人の王子』

りんくう総合医療センター産婦人科　荻田　和秀（平成４年卒・７期生）

大学を卒業してもう24年になる。

在学中はあまりにも講義に顔を出さないものだから幽霊学生だの特別講義しか出席しないから特講隊などといわれたものだ。卒業間近には香川大学の某医局に入局をちらつかせて通い、散々飲み食いした挙げ句バックレて別の医局へ入った。本来なら香川県には終生出入禁止、全国津々浦々に破門状が廻っていてもおかしくないどころか八十八カ所のどこかの寺で呪詛の対象になるべき人間なのである。

今や若き日のあまりの沙汰を反省し会費は支払っているものの、同窓会には顔を出したことがない。もとへ、顔を出せない。それが何を今更、どの面を下げて同窓会報に駄文を寄せればいいのかと大いなる葛藤をし呻吟をしているうちに遂に〆切が過ぎた。この上会報への寄稿をオトシたとなればもうこれは玉藻城でさらし首に違いないので何も考えずに書くことにする。

昨年来〆切に追いまくられているのは、ひとえに10月からTBS系列で放映されたドラマ「コウノドリ」の影響に他ならない。周りの人間には一応好評なので、彼らが僕に気を遣っていないのなら成功した部類に入るのではないかと思っている。実際、2015年ドラマ満足度年間ランキングでは「下町ロケット」に次いで第２位につけた（テレビウォッチャー調べ）。「コウノドリ」は、周産期医療を描いたドラマである。原作は講談社の週刊モーニングに2012年から連載している同名のマンガで、作者は鈴ノ木ユウ。現在累計300万部を売り上げている。主人公は鴻鳥サクラという卒後15年目くらいの産科医で、施設育ちの有名覆面ジャズピアニスト。勤務地は多摩地区のあたりの「ペルソナ総合医療センター」という名の地域周産期センターということになっている。患者を常位胎盤早期剥離で失ってから笑わなくなった同期の四宮ハルキ、後期研修医の下屋カエ、助産師の小松ルミ子という同僚がいる。新生児科の今橋、途中でバーンアウトしてしまう新井、下屋の同期白川や、麻酔科の船越、救命科の加瀬といった仲間と協働して搬入されてくる様々な妊婦の分娩に立ち会うという地味～な筋書きである。ただ作品の根っこにあるのは徹底したリアリズムである。一人

のスーパードクターが極めて希な疾患や重篤な疾患をあり得ない手技や術式で治療するなどということが一切ない。医療マンガにありがちな立身出世や個人的な利益に走る医師もいないし物語のなかでは恋愛さえ登場しない。「自分は失敗しない」などという不遜な医師も登場しないし「誰かへの復讐」などといったサスペンスもない。扱っている症例は未受診妊婦、妊婦の交通外傷、切迫早産、超低出生体重児、ローティーンの妊娠、不妊症、高齢出産、産褥出血、妊娠高血圧症候群、死戦期帝王切開…　恐らく周産期センターで働いている産婦人科医なら経験する聞いたことのある症例ばかりの筈だ。実は、原作者にネタを仕込んでいるのは僕と僕の医局の後輩で某総合周産期センターの奴だからだ。

僕は大学卒業後、１年国試浪人をして大阪大学の産婦人科へ入局した。１年大学の附属病院内で研修した後、大阪警察病院で２年研修して念願の大阪府立母子保健総合医療センターに転属となり、そこで２年どっぷり周産期医療に浸かった。大阪大学へ戻ってから研究生となり、分子生物学にのめり込んでしまいそのまま大学院に進んだものの折からの人手不足で大学のART（補助生殖医療）外来のチーフをやりながら卒業。「生殖医療をやってる奴は産婦人科医の頭数に入れるな」という正論（暴言とも言う）を吐いてようやく生殖医療から足抜けを赦され（放逐とも言う）、大学病院の周産期にもぐり込んだ頃がちょうど「周産期崩壊」

と言われている時期だった。周りの施設が分娩制限をする中で「断らない」事を前提に診療をするうちに40歳手前あたりで産科チーフになった。丁度その頃、後輩から幼なじみが里帰り分娩をするので診て欲しいと頼まれて診ていた妊婦さんがかの鈴ノ木ユウ氏の奥方だったという訳である。実は奥方もメジャーデビューしていたロックシンガーで、旦那もインディーズのギタリストだと教えて貰い、当時僕も暇を見つけては阪神間でピアノを弾いていたので意気投合し、音楽の話もかなりした覚えがある。程なく僕は地域産婦人科の集約化をすすめる大阪の最南端（泉州といういろんな意味で大阪のパタゴニアと呼ばれる地域）の周産期センターへ転属となり、その事をすっかり忘れていた。後背人口66万人の中での産婦人科集約化については紙幅の都合で別項に譲らねばならないが、今から考えても壮絶な症例の往復ビンタをうけるような毎日だった。転任して４年経った2012年、突如後輩から、鈴ノ木君が先生をモデルにマンガを書いているのでついては一度会って仁義を切りたいと言っていると連絡があった。全く理解できずに東京出張の時に新丸ビルで会ってみると、彼は音楽でメジャーデビューを果たしたものの子どもも生まれたしマンガを描こうと思っている、という。大学で油絵をしていたこと、ちばてつや賞に入賞していたことをこの時はじめて知った。この夜はしたたかに呑み、八重洲口まで走って新幹線の最終に乗り込み、渡されたネーム（マンガの下絵みたいなもの）を読んで涙と吐瀉物をまき散らしたのが「コウノドリ」との出会いであった。その後半年に一度くらいの病院への取材とメールでのやりとりをしながら「コウノドリ」は連載が続いてゆく。

周産期医療というのはどんな医療か。

研修医の頃、重症患者を受け持つたびに「これは救急医学の端くれだ」と思っていた。かなりの頻度で妊産婦は何千ml出血する。場合によっては１万mlを超える出血をみる。ところが心停止が切迫しようが、甲状腺クリーゼが起ころうが、肺塞栓が起ころうがもともとyoung & healthyな人だから戦略さえ間違わなければほとんどの人が後遺症無く赤ちゃんを抱っこして帰って行く。これは若年者の外傷と同じではないのか。泉州に着任と同時に救命センターへ行き、協働の必要性を討議した。現在はショック・外傷・意識障害のある妊産褥婦はまず救命科と外傷初期診療のプロトコルを用いて循環の安定をはかっている。産科・救命科のコラボの誕生である。

その話を鈴ノ木氏に熱く語り、取材の時に救命や新生児科の仲間を紹介し、皆で呑みに行ったりした。それがマンガとなって今やペルソナ総合医療センターで救命医加瀬や新生児科医今橋が産科と一緒に走り回ることになった。

そこには何でも一人で解決するスーパードクターもいないし「自分は失敗しない」などという不遜な医師も登場しない。それが「コウノドリ」を貫く脊柱であり、周産期医療の肝である。

周産期医学というのは、救急医学の端っこに位置する医学である筈であるからだ。

ふとしたきっかけでつかみ取る幸運をserendipity（セレンディピティ）と呼ぶが、その語源はご存じだろうか？それは『セレンディップの３人の王子』という寓話からの造語だ。この言葉をでっち上げたウォルポールはこう言っている。「そのお話において、王子たちは旅の途中、いつも意外な出来事と遭遇し、彼らの聡明さによって、彼らがもともと探していなかった何かを発見するのです。たとえば、王子の一人は、自分が進んでいる道を少し前に片目のロバが歩いていたことを発見します。なぜ分かったかというと、道の左側の草だけが食べられていたためなのです。」

恐らく鈴ノ木ユウ氏にとって、僕という片目のロバを見つけたことがserendipityだったのだろう。僕にとっても「コウノドリ」が話題になることはserendipityだったと言わねばなるまい。それは周産期医療について知らなかった人たちが周産期医療への理解を深めるきっかけになる可能性があるからだ。そして３人目の王子である綾野剛は あ 字数が過ぎた。それは次号で述べるとしよう。

（編集部注：次号には続きません）

◆荻田先生の著書紹介◆

『嫁ハンをいたわってやりたい
ダンナのための
妊娠出産読本』

講談社＋α新書　2015年

研究助成金／研究奨励金

平成27年度研究助成金部門受賞のことば

香川大学医学部　消化器・神経内科
小原　英幹（平成９年卒）

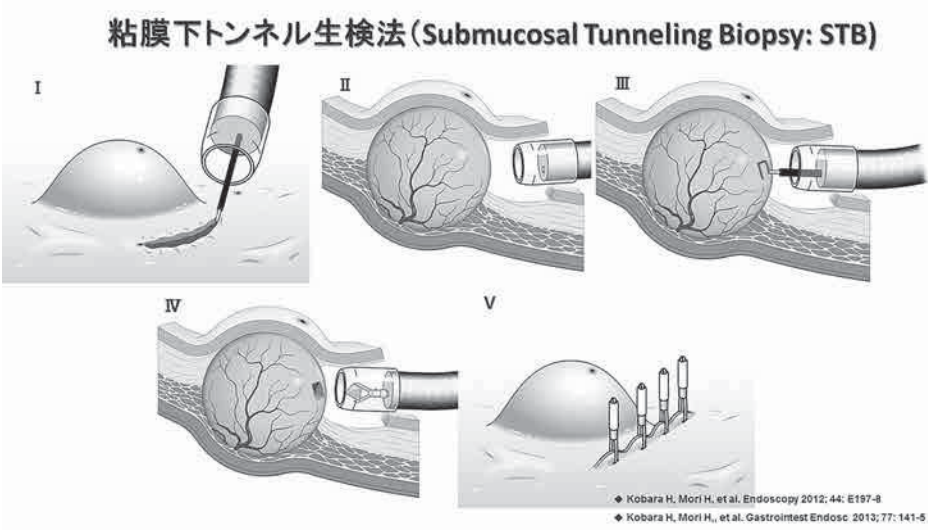
このたび、我々の「**消化管粘膜下腫瘍におけるmicroRNA解析から導かれる病態解明と予後因子予測**」の研究テーマが平成27年度香川大学医学部讃樹會の研究助成金を賜り、感謝の意を申し上げます。

本研究の主要目的は

1．　消化管間葉系腫瘍（gastrointestinal stromal tumor: GIST）と良性平滑筋腫の血清学的鑑別マーカーの確立
2．　悪性度別GISTの増殖・転移能についてmicroRNAによる分子メカニズム解明
3．　新たな創薬の探索を３本柱として研究を進めております。

消化管粘膜下腫瘍は、正常粘膜に覆われ、粘膜上皮下を主体に発育する腫瘍の総称であり、通常の上皮組織生検で診断困難であります。それゆえ、未診断のまま、経過観察される患者様の不安感は拭えない訳です。そこで、我々は粘膜下層に小さなトンネルを作成し腫瘍視認下での安全・確実な組織採取法、以下、粘膜下トンネル生検法を考案しました。本法は［下図、Ⅰ～Ⅴ］で示した５つの手技で構成されます。Ⅰ．侵入口10mmの小切開　Ⅱ．腫瘍に向ってトンネルを掘るように粘膜下層を剥離し、腫瘍を視認　Ⅲ．直視下に先端系ナイフを用いてブロックで組織採取　Ⅳ．組織回収　Ⅴ．最後に進入口のクリップ閉鎖にて術後偶発症を回避するという手法です。

本法と標準法である超音波下針生検法の免疫学的診断率及び安全性を評価項目とした前向き比較研究にて免疫学的組織診断率は本法が針生検法に比較し有意な結果となりました。この成果で、2013 United European Gastroenterology Week Top 5 Abstract Prizeを頂き、research mindが沸騰してまいりました。また、本法から派生した研究として、内視鏡でみえなかった腫瘍が視認できるようになり、疾患毎に腫瘍自体の内視鏡像が特色を有すると



して内視鏡視認下像の新分類を提唱するに至りました。

本法の臨床研究を進めていく過程で、これまでに採取困難であった小さな腫瘍でも腫瘍視認下に確実な純検体を得ることが可能な本法の特色を生かして、患者様に侵襲のない新たな血清学的鑑別マーカーとなる診断法を見出せないかと思案したわけです。基礎研究に適したその純検体を用いて臨床的鑑別意義の大きいGISTと平滑筋腫のmicroRNAの網羅的解析を行い、有意発現した特異的microRNA140-3p,5pを同定しえました。GISTの新たな血清学的鑑別マーカーとなる診断法の確立を目指しています。

また、診断されれば原則、切除とされるGISTは、転移リスク分類別にどのようなメカニズムで転移能を獲得するか未だ明らかでありません。悪性度別GISTの増殖・転移能についてmicroRNAによる分子メカニズム解明を進めていくとともに新たな創薬の可能性を探求しています。

この研究の推進には、若手研究員と連携した研究チームが不可欠になります。モチベーションの高い若手研究者、藤田君、藤原君、千代君の存在が大きな力となっています。学会活動、論文作成等、ともに、長い時間を共有しています。社会貢献できる研究をという同じ志を持ち、Boys be ambitiousの精神を持つ若手研究者とともに、「香川大から世界へ」を合言葉に医学貢献できるよう加速力を持って研究を進めてまいりたいと思います。今後とも、ご指導、ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

平成27年度研究奨励金部門受賞のことば

香川大学医学部　形成外科
濵本　有祐（平成12年卒）

この度は讃樹會研究奨励金を頂き、大変光栄に思うと同時に、讃樹會の皆様、ご指導・ご支援を頂いた皆様に、心から感謝申し上げます。

私は香川大学形成外科で研修後、国立がんセンター東病院で頭頸部外科レジデントとして３年研修を行い、2009年に香川大学形成外科に戻って参りました。当科の田中嘉雄教授はTissue Engineering Chamberを用いた人工皮弁移植の研究を以前から行っており、研修医時代に読んで興味を持った研究論文の著者その人でした。臨床における専門分野もMicrosurgeryで共通しており、田中教授に研究手法を教わりながら研究をはじめました。今回の研究テーマである、「複合組織移植における酸素濃度の影響」も、人工皮弁開発の過程で興味を持ち、少しずつ修正しながら続けています。私は2016年１月よりオーストラリアのメルボルンにあるO'Brien InstituteおよびSt. Vincent's Hospitalに留学することになり、国外留学助成金も頂けることになりました。香川大学で共同研究を行っている医局員と協力しながら、研究奨励金による本研究が組織移植の安全性と質の向上につながるように努力してまいります。誠にありがとうございました。

◆◆研究助成金/奨励金　28年度学外評価委員のお知らせ◆◆

学外評価委員の先生方に心より感謝申し上げ、お名前を発表させていただきます。
尚、本年度の応募要領につきましては、次ページ（又は讃樹會HP）を参照下さい。

平成28年度学外評価委員

臨床科

	氏名	役職	勤務先	所属
1	伊藤　　進	名誉教授	香川大学	
2	今井　裕一	教授	愛知医科大学	腎臓・リウマチ膠原病内科
3	香美　祥二	教授	徳島大学医学部医学科	発生発達医学講座　小児医学
4	成瀬　光栄	内分泌研究部長	国立病院機構京都医療センター内分泌代謝研究センター	内分泌代謝高血圧研究部
5	水野　博司	教授	順天堂大学医学部	形成外科学講座
6	吉栖　正生	教授	広島大学大学院医歯薬学総合研究科	創生医科専攻　探索医科学講座心臓血管生理医学

基礎科

1	梶谷　文彦	名誉教授	川崎医療福祉大学特任教授／岡山大学特命教授／医療技術産業戦略コンソーシアム（METIS）共同議長	
2	小林　良二	名誉教授	香川大学	
3	田畑　泰彦	教授	京都大学再生医科学研究所	生体組織工学研究部門生体材料学分野
4	徳光　　浩	教授	岡山大学大学院自然科学研究科	生命医用工学専攻　細胞機能設計学
5	西堀　正洋	教授	岡山大学大学院医歯薬学総合研究科	薬理学
6	藤田　　守	教授	中村学園大学　栄養科学部	栄養科学科
7	三浦　克之	教授	大阪市立大学大学院医学研究科	薬効安全性学
8	森田　啓之	教授	岐阜大学大学院医学系研究科神経統御学講座	生理学分野

（敬称略）

香川大学医学部医学科同窓会讃樹會
平成28年度研究助成金／奨励金応募要領

1．研究助成の目的

学内外で活躍している同窓生の行っている研究活動をサポートし、それらの社会への還元を促進すること。

2．助成対象者

研究助成金：香川大学医学部(旧香川医科大学)医学科同窓会の会員で卒後25年以内の者で申請時より遡って５年間（準会員期間を含む）の会費を納入している者。

研究奨励金：香川大学医学部(旧香川医科大学)医学科同窓会の会員で卒後15年以内の者で申請時より遡って５年間（準会員期間を含む）の会費を納入している者。

研究助成金は、１回受賞した後はインターバルを３年置いて再度申請が出来る。
研究奨励金は、１回の受賞をもってその後の申請は出来ないこととする。

尚、両者を同時に応募することはできない。

3．助成期間　１年間

4．助成金額

研究助成金：1,000千円を１名。
研究奨励金：500千円を１名。

5．選考方法

外部評価者による厳正な審査を経て、讃樹會理事会で決定する。

6．研究成果の報告義務

（１）研究助成を受けた方は、助成研究の結果（助成研究報告書）と研究助成金の使途明細（助成研究会計報告）を、助成２年後の平成30年９月30日までに提出する。

（２）助成研究の成果を助成研究発表会で発表する（日時・形式については別途連絡)。

（３）助成研究の成果は、原則として学術誌に投稿すると共に、別刷一部を提出する。

（４）過去において助成された事績がある応募者は、その助成課題に対して学術誌に投稿（受理を含む）しておれば、別刷一部を添付。ただし、既に提出済みの別刷はその必要はない。論文に讃樹會への謝辞が記載されていないものについては、受け付けない。

（５）以上の報告義務を怠った場合には、助成金の返却を求める場合がある。
尚、やむを得ず申請者が手続きを完了できない場合には、共同研究者によってすべての報告が代行されるものとする。またこのような事が生じた場合は、総合的な責任は推薦者に発生するものとする。

7．平成28年度申請手続き

（１）申請書
讃樹會所定の申請書「第１号～第８号様式」を書面で「書留便」などの確実な方法で提出のこと。
提出部数は原本各１部、複写各４部。申請書は讃樹會HPからダウンロードして下さい。

（２）受付期間
平成28年２月１日～平成28年４月30日（締切日必着)。

（３）提出先
〒761-0793 香川県木田郡三木町池戸1750-1
香川大学医学部医学科同窓会讃樹會　担当　柚山
TEL･FAX：087-840-2291
URL：http://www.kms.ac.jp/~dousou/
E-mail: dousou@med.kagawa-u.ac.jp

8．選考結果の通知

結果は文書で通知する（平成28年８月の予定)。
尚、提出書類は返却しない。

国外留学助成金 受賞者の言葉　平成27年度第２回

濵本　有祐（平成12年卒）　香川大学医学部　形成外科

留学先機関：O'Brien Institude of Microsurgery, Melbourne University
留学期間　：平成28年１月～平成28年７月
研究課題　：血管付加脂肪組織の再生に関する研究

【受賞のコメント】

今回の留学を実現するにあたり田中嘉雄教授をはじめたくさんの方々のご支援をいただきました。この場を借りて深謝致します。私は2016年１月よりオーストラリアのメルボルンにあるO'Brien InstituteおよびSt. Vincent's Hospitalに留学する予定です。留学先のWayne Morrison 教授はマイクロサージャリー、再生医療で著明な外科医であり、研究者です。香川で創傷外科学会を開催した際にお会いし、研究内容はもとよりその人柄に惹かれ留学を希望していました。３人の子供に恵まれ、留学資金に困っていたところに讃樹會の国外留学助成金を知り、応募させていただきました。讃樹會研究奨励金も併せて頂いており、非常に感謝しております。今回の留学が、讃樹會研究奨励金で助成して頂いた研究の進歩、組織移植の進歩に少しでも貢献できるよう、努力してまいります。本当にありがとうございました。

河口　浩介（平成18年卒）　京都大学医学部医学研究科外科学講座　乳腺外科学

留学先機関：Massachusetts General Hospital, Harvard Medical School
留学期間　：平成28年９月～平成30年８月
研究課題　：癌微小環境における宿主免疫応答の解明と治療抵抗性腫瘍に対する新規治療戦略の開発

【受賞のコメント】

謝辞　この度は、香川大学医学部医学科同窓会「讃樹會」における国外留学助成金を拝受しましたこと、心より感謝申し上げます。私は2016年９月よりハーバード大学並びにマサチューセッツ総合病院に所属しPhysician Researcherとしての第一歩を踏み出すことになりました。私の研究テーマは癌をとりまく環境（癌微小環境）における免疫応答のメカニズムを解明し、これまで治療が難しいといわれている癌に対する治療戦略を開発する事です。しばらくの間は臨床から離れることになりますが、臨床医としてこれまで癌患者さんと向き合ってきた事を忘れず、一人でも多くの患者さんの笑顔に繋がるよう、研究に全霊を捧げたいと思っております。香川を離れて10年になりますが、このような形で応援して頂けますことを本当に嬉しく思い、またいつも叱咤激励して頂いております香川大学の先輩・同級生・後輩に感謝しております。最後になりますが本助成金を申請するにあたり、快く推薦をして下さいました、バスケットボール部OBの宮部和徳先生並びに三崎伯幸先生に深く御礼申し上げます。

豊田　康則（平成19年卒）　香川大学医学部　脳神経外科

留学先機関：University of Michigan Crosby Neurosurgical Laboratories
留学期間　：平成27年10月～平成29年９月
研究課題　：出血性・虚血性脳卒中における脳損傷の機序及び神経保護の機序の解明

【受賞のコメント】

この度は、香川大学医学部医学科同窓会「讃樹會」に於ける国外留学助成金を賜りましたことを、この場を借りて心より感謝申し上げます。私は2015年10月よりUniversity of Michigan Crosby neurosurgical laboratoryに所属し、「くも膜下出血モデルにおける鉄代謝、マイクログリアの役割」についての研究を行っております。University of Michiganは様々な分野で有名な大学であり、世界中から多数の留学生が所属しております。また香川大学脳神経外科講座からも10数年にわたり諸先輩方が留学し業績を残してきた、関わりの深い大学でもあります。実際に実験を始めてみると皆が様々なアイデアで動いていることに驚きを隠せず、自分もそれに続けるように思考を巡らす毎日です。２年間の期間の中で様々な経験を積み、業績として残せるように頑張っていこうと思います。今回の留学にあたり、たくさんの方々のご支援をいただきました。この場をお借りして感謝申し上げます。

国外留学助成金留学レポート

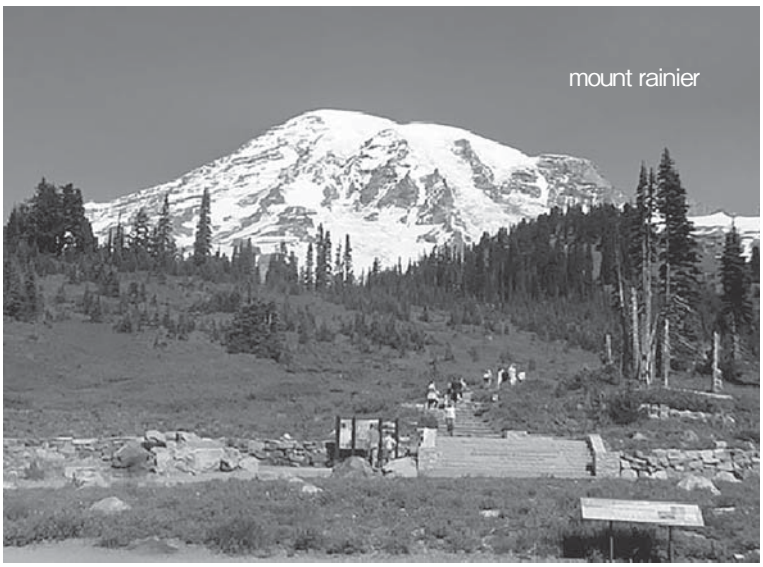
ワシントン大学留学記

香川大学小児科　岩城　拓磨（平成14年卒）

シアトルの景色

2013年４月から2015年３月までアメリカ合衆国ワシントン州シアトルのUW（University of Washington）Medicineで研究留学の機会をいただき腎臓病の研究をしてきました。留学に際して多大なご援助を頂きました讃樹會会員の先生方にまずは深く御礼申し上げます。この留学は香川県小児科医会会長の藤澤卓爾先生、久留米大学医療センター元小児科教授の伊藤雄平先生、当時Seattle Children's Hospital腎臓科（現在UT Health Science Center at San Antonio 腎臓科）の山口郁代先生、香川大学ならびに香川大学小児科医局スタッフみなさんのご支援があり実現しました。本当にありがとうございました。

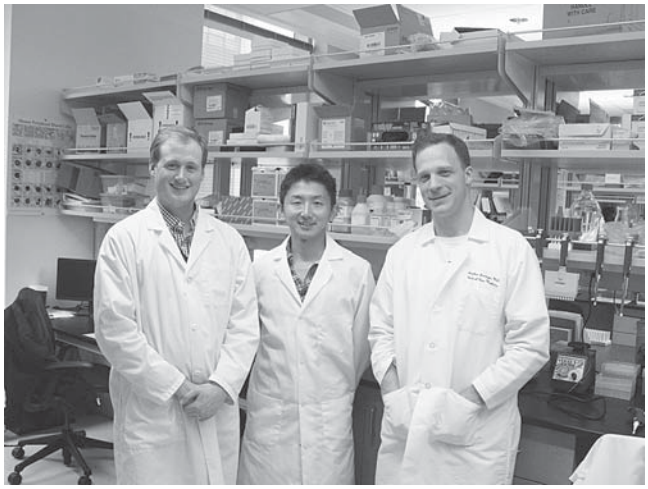
シアトルはアメリカの北西部に位置し、山と湖と緑に囲まれたエメラルドシティありでイチローの活躍でも一躍脚光を浴びました。またMicrosoft、Amazonを初めとしたIT系の企業がひしめき最先端の技術を求め世界中からたくさんの研究者、技術者がやってくる北西部最大の都市です。またスターバックス発祥の地でもあり香川のうどん屋並みにスターバックスがあります。右も左も英語もわからない状況で山口郁代先生にJeremy Duffield labを紹介していただき研究生活がスタートしました。Jeremy Duffieldは腎臓病の分野では最も脚光を浴びる腎臓科医の一人であり非常に活気のあるラボでした。腎臓病に関して幅広くプロジェクトが進行中でしたが特に力を入れていたのがPericyte（周皮細胞）の研究でした。Pericyteは腎臓においては傍尿細管周囲毛細血管内皮細胞の間に介入している細胞で慢性腎臓病における線維化はこのPericyteに由来していると最近の研究でわかってきました。それまでは腎臓の線維化はダメージを受けた尿細管上皮細胞が形質転換を起こし線維産生細胞になると考えられておりこのPericyteの研究は大きなパラダイムシフトを起こしました。研究経験の全くなかった私はこのラボではまず研究の基礎となるgenotyping、免疫染色、蛍光染色、PCR、Western blottingの手技を覚えました。このラボではたくさんの研究者がいたためみんな忙しい中でも少しずつ色んな実験手技を教えてもらうことができました。すさまじい速さでしゃべられる英語にはついていける訳もなく２度聞きは当たり前、最後は笑顔でごまかす毎日でした。そんなこんなで５か月くらい経った頃に待望のプロジェクトをもらうことができました。肝腎症候群における急性腎障害に対してRelaxin投与が有効かどうかという内容でその初期段階としてマウスの腎障害のモデルで



Relaxinのレセプターであるrelaxin/insulin-like family peptide receptor 1（RXFP1）の発現が増えるのかどうかを調べるところからスタートしました。Relaxinは妊娠期に発現が増える蛋白で出産に備えて骨盤周囲の靭帯を緩める（文字通りrelaxさせる）働きがありますが腎血管拡張作用もあるとみられている蛋白です。片側の尿管を結紮したUnilateral Ureteral Obstruction（UUO）モデル（慢性腎障害のモデル）、片側の腎動脈を一時的に結紮して再開通させるIschemic Reperfusion Injury（IRI）モデル（急性腎傷害のモデル）を使って遺伝子*RXFP1*と蛋白RXFP1の発現を調べました。遺伝子*RXFP1*の発現はIRIモデルで増加していることを確認できましたが、この頃にボスがボストンの製薬ベンチャー企業に移籍することになりました。アメリカでも研究費の緊縮が進んでいてグラントを保持し続けることが大変でラボの閉鎖は日常茶飯事のようです。交換留学生で来ている私が企業に移籍することはできないため教育機関で新しいスポンサーを探さなければならなくなりました。蛋白RXFP1の発現を証明することはできずここでRXFP1の研究は終わることになりました（この研究はボストンでも引き続き継続中のようです）。その後は再び山口郁代先生の紹介で別のラボで受け入れてくれることになり研究生活を継続することができるようになりました。新しいラボのボスはSteve StandageというPICUのドクターで私と同じ年齢の若いボスでした。ここでは敗血症に伴う臓器障害（心臓、肝臓、腎臓）の研究を行っていて私はその中で腎臓を担当することになりました。敗血症は盲腸を結紮してそこを針で穿刺し、腹膜炎を起こすモデルCecal Legation Puncture（CLP）モデルを使用しました。peroxisome proliferator-activated receptor-α（PPARα）という中性脂肪のβ酸化を促す転写因子が急性腎傷害において病態を改善するかどうかという研究テーマでした。仮説としては急性腎傷害の時はPPARαの発現が下がり脂肪代謝が抑制されβ酸化されなかった中性脂肪が細胞に沈着して腎傷害を引き起こすというものでした。実際CLPモデルでは腎組織の中性脂肪は上がっていましたがこれは腎障害を促すものなのか腎臓を守るための代償反応なのかはっきりせず更なる検討が必要と思われました。

この留学を通し学んだことは病気の病態を分子生物学的に捉えることの大切さです。遺伝子、蛋白レベルで病気がとらえられれば治療法のオプションは増えるし治療法がなかった難治性疾患が治療できるようになるかもしれません。また学術的な観点を持ちながら仕事をすれば病気の理解はより深まり興味をもって診療に当たれるのではないかと思います。これは自分の小児科人生において大きな財産です。この経験を生かし小児科医としてまた成長していけたらと思います。

ラボ



学生の短期留学報告

Newcastle University　2015年４月16日～５月31日

６年　濱田　康宏

糖尿病センターの休憩室にて。白衣禁止のため医師は私服で、右から４人目がセンター長のDr. Leech

①　学習状況について

感染症科、糖尿病センター、救急部の順に２週間ずつ、計６週間の実習を行った。感染症科では病棟実習と外来実習を行った。病棟では、毎日の回診に参加し、その後の自由時間に個別に病歴聴取と身体診察を行った。２週目の木曜日には、スタッフの前で症例プレゼンテーションを行った。外来実習では、一般外来とトラベルクリニック、肝炎外来を見学した。糖尿病センターには病棟が無いため、センター全体の見学実習を行い、糖尿病治療や患者への応対についての理解を試みた。イギリスでは病院の専門医とかかりつけ医general practitioner が制度として分業していることもあり、ほとんどが特殊な専門外来であった。救急部では、医師の許可を得た上でwalk-in患者を自分で呼び入れ、病歴聴取と身体診察を行い鑑別やプランを考え、医師にプレゼンテーションし、改めて医師の診察を見学するというスタイルの実習を行った。

患者さんは大変協力的で、学生の実習を嫌がらず受け入れてくれた。採血で失敗したときなどは学生を励ましてくれたほどである。また、スタッフや現地の学生もフレンドリーかつ親切であり、「困ったことは無いか？」「楽しんでいるか？」などと声をかけてくれ、一人で配属されても心細く感じさせない。

②　生活状況について

Newcastle Universityより提案されたCastle Leazesという寮に滞在した。この寮から病院までは徒歩10分もかからず、また、駅や市の中心部へ徒歩で移動できる場所に位置している。基本的には快適な生活を送ることができ、香川大学の学生はすぐ近くの部屋に割り当てられていたためコミュニケーションに不自由しなかった。食事付きの契約をしたところ、土日を除く朝夕はカフェテリア方式の食堂が使えて大変便利だった。

平日は朝から夕方まで病院実習を行い、週末は観光を行った。Newcastle自体は観光地ではないが、近場に様々な観光地があり、またイングランド東北部からは湖水地方やスコットランドへ出かけやすい。

公私ともに大変お世話になった、感染症科のDr. Schmidと。左から丹羽君、石塚さん、濱田、Dr. Schmidとそのご家族（撮影者：加治君）

③　後輩へのアドバイス

まず早めにIELTSの勉強を開始することが肝心である。５年に入ると余裕を失うため、IELTSの勉強は４年次に開始して５年に進級する前に受験するのがベストである。特に、あまり馴染みのない形式で行われるwritingとspeakingの対策が重要である。留学に関して重要なのはlisteningである。現場での会話はnatural speedで、しかも一部の人の発音は聞き取りにくい。外来診察や医師同士のディスカッションに、単に聞き返すためだけに割り込むのも難しい。

留学するか迷っているのであれば、迷わず申し込むことをすすめる。明確な目的意識を持って留学することは大切であるが、仮にそうでなくても、外国の病院に行って一人で実習するという経験は将来必ず役に立つと確信している。

④　その他

医薬品については、一般名の使用が徹底されてい

た。処方箋は一般名で発行されており、医療スタッフ間の会話でも一般名が使われていた。先発薬と後発薬の違いを懸念する様子は無く、ジェネリック医薬品の普及率の高さがうかがわれる。

“Newcastle”の発音は「ニューカースル」が近い。「ニューキャッスル」とするのはアメリカ英語のようである。

多大なるご協力をいただいた徳田先生、Schmid先生、芝原さんをはじめとする日英の皆様と、金銭面でご支援いただいた日本学生支援機構ならびに讃樹會に感謝いたします。

チェンマイ大学留学　2015年３月21日～４月11日

６年　廣畑　俊和

私は３月23日から４月10日の３週間、６年次のスーポリの選択で、チェンマイ大学の海外研修に私を含む４人で行かせていただきました。チェンマイはタイの北部に位置し、ラーンナータイ王国の首都として古くから発展し、王国が廃止された現在も北部の文化・経済の中心であり、一般にバンコクに次ぐタイ第２の都市です。チェンマイではタイの医療、チェンマイの文化について多く学び、とても貴重な経験を得る事ができました。

実習内容としては２週間を内分泌内科、１週間を総合内科に配属させていただき、外来や回診の見学、モーニングカンファレンスの参加や病棟で採血などの手技をさせていただきました。実習中は２月に香川大学に短期留学に来た学生が面倒をみてくれました。彼らは本来３月から４月の中旬まで春休みでしたが、私たちがチェンマイに留学に来るということで休みを返上してアドバンスとして実習に参加してくれました。内分泌内科では主に外来と病棟回診を見学させていただきました。外来の患者は主に糖尿病、甲状腺疾患で日本でも多く見られる症例でした。特に糖尿病はタイ北部の食事には糖類がとても多いということもあり、チェンマイは糖尿病患者がタイ全土でも圧倒的に多い地域であると教わりました。（私が経験した中にも店でコーヒーを注文したら練乳を大量にかけられたり、タイの人々と食事に行くと毎食後に必ずデザートを食べていました。）病棟回診でも糖尿病関連の急性期患者は多くみられました。総合内科では主に病棟実習で、研修医の方とマンツーマンで症例検討や採血などの業務の手伝いをさせていただきました。回診では上級医の先生が学生や研修医に様々な質問を投げかけ、緊張感がありました。一学年下のチェンマイの学生が賢く、はきはきと答えていました。私は悔しさと情けなさを感じ、勉強の向上心もわきました。

また、チェンマイの学生にタイの医学教育や卒業後の進路について教えてもらいました。タイの医学教育で素晴らしいと感じたのは英語教育です。学生も英語が堪能で、モーニングカンファレンスでは研修医と上級医がディスカッションする場面も英語で話すことが多く見られました。チェンマイ大学ではほとんどの学生が在学中にUSMLEを受験し、卒業時に取得するそうです。学生の中には卒業後にアメリカで働く人もいるそうです。私には到底無理な話ですが、チェンマイ大学にはグローバルな医師を育てる教育制度があり素晴らしいと感じました。

留学期間中、香川に来たことのある医師、看護師、学生が私たちを食事や観光に誘ってくれました。彼らが口を揃えて言うことは、

「香川では皆が親切にしてくださりとても感謝しています。今度は私たちが香川の人たちをもてなしたいと思っています。」

という言葉でした。私はそこに香川大学とチェンマイ大学の深い繋がりを感じ、感銘を受けました。

後輩の方々にはこれからもチェンマイ大学のみならず、香川と縁のある大学との交流を深めていただきたいです。それは留学だけに限らず、香川に留学にくる方々のために開くパーティや企画に参加するだけでも構いません。英語が上手でない私も最初は行くのを恥ずかしく感じていましたが、今では海外の方々と話すのにも慣れました。私たちが今回の留学でお世話になった方々の多くは先輩方や徳田先生をはじめとする先生方が関係を築いてくださった方々です。そういった国際交流の歴史をこれからも大事にしていただきたいと思います。

Universiti Brunei Darussalam　2015年７月18日～８月25日

２年　秋山めぐみ

結核センターの見学

①学習状況について

この短期留学の学習プログラム内容は、PBL・講義・OSCE・病院見学・First Aid･Oral Presentationと盛り沢山でした。二年生はまだ専門勉強が始まったばかりの医学知識も乏しい状態で、このプログラムに参加させていただきました。勉強の中心となったPBLでは、感染症の結核と大腸癌について学びました。日本ではこのPBLという学習方法はあまり行われておらず講義中心のため、シナリオに沿って自分たちの疑問点を挙げ、そのことについて各個人で調べ理解したことを互いに英語で説明しあうというスタイルはとても新鮮でした。どのように調べるかという点でまず苦労し、理解したことを相手にわかるように説明することに苦戦しました。ただ、このように疑問点を自分の力で解決していくという勉強法を体験できたことは、これからの大学で講義を受け、（今までは講義を受けるだけで終わっていましたが）今後は生じた疑問を自分で調べることで講義を最大限活用することができると思っています。

②生活状況について

ブルネイ国は、イスラム文化の影響を大いに受けている国で、私にとってイスラム文化を初めて経験しました。毎日五回の祈りを呼びかけるアザーンを聞いたり、ハラルフードを食べたり、ショッピングモールや病院に祈る場所があることを見たりと、イスラム中心の社会を見ることができました。特に私たちがブルネイ国に行った時期はちょうど断食月（ラマダーン）明けのお祭り（ハリラヤ）の時期でした。ハリラヤは一年の中でも大きなお祭りで、その時期には王宮が開放されブルネイ国の王様や王女様と握手することができ、各家庭が自宅を開放し食事をもてなすので、一日に何軒もオープンハウスに行き、何度も昼ごはんを食べるという初めての経験もしました。このように滞在期間の前半はイスラム文化に強く触れました。また、現地の学生が私たちを市場・ショッピングモール・映画･カフェ･博物館等いろいろな場所へ連れて行ってくれて勉強面と同じくらい遊びの面も充実した日々を過ごすことができました。

③後輩へのアドバイス

私は、留学条件の英語試験のTOEICの点数を満たしていませんでしたが、ブルネイ短期留学に参加したい！という強い思いで、「当たって砕けろ」精神で、募集に応募しました。条件をクリアしていないため面接では厳しいお言葉をいただきましたが、感謝なことに今年度の希望者が人数制限を越えていなかったため、私も参加することができ、ブルネイへ行き日本では経験できないことができ、沢山の友達を作ることができました。やはり英語の能力が足りないため苦しいときもありましたが、そのこともいい経験で、今後の英語学習の励みにもなると思っています。２～４年生が参加できますが、どの学年の時に行ってもそれぞれ必ず得るものがあると思います。なので、行きたいと思ったときにぜひ挑戦して欲しいと思います。

友人のお宅訪問

学会開催報告　《第33回日本脳腫瘍病理学会学術集会》

脳神経外科　新堂　敦（平成７年卒）

第33回日本脳腫瘍病理学会学術集会が会長　香川大学医学部脳神経外科　田宮　隆教授、副会長　弘前大学大学院医学研究科病理診断学講座　黒瀬　顕教授により2015年５月29日（金）、30日（土）にJRクレメントホテル高松にて開催された。近年の脳腫瘍病理の進歩はすばらしく、形態学に免疫染色、遺伝子解析などの分子生物学的研究を加え発展してきている。特に診断のみならず治療においても分子生物学的な解析研究が非常に重要になってきているため、主要テーマとして「形態と分子の融合」とした。海外から２人の先生を招待した。

Prof. E. Antonio Chiocca（Harvey W. Cushing Professor of Neurosurgery, Brigham & Women's Hospital, Harvard Medical School）より、特別講演「Exosomes, microvesicles and microRNAs as critical links in glioma communication」とランチョンセミナー「microRNAs as modulatorsof glioma “self-renewal”」を講演していただいた。

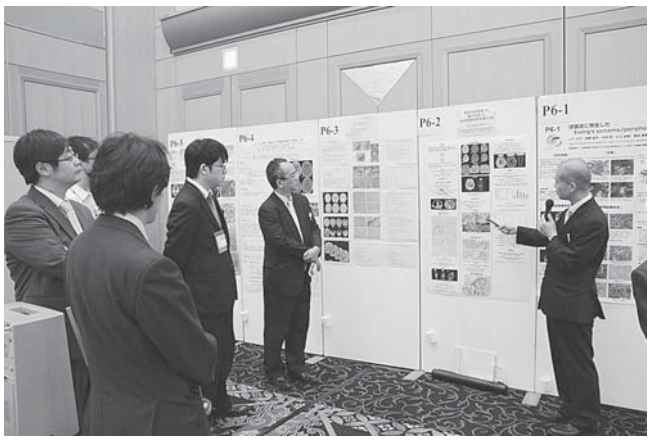
Prof. Gregory N. Fuller（Professor, Department of Pathology, The University of Texas, M. D. Anderson Cancer Center）より、特別講演「Molecular Diagnosis and Classification of Brain Tumors Comes of Age: A Preview of the Upcoming Revision of the World Health Organization Classification」とランチョンセミナー「Mesenchymal Tumors of the CNS: New Molecular Tools for Diagnosis」を講演していただいた。

教育講演として、岡山大学大学院医歯薬学総合研究科　病理学（腫瘍病理／第二病理）吉野　正先生より「リンパ腫分類の概要」、香川大学医学部病理病態生体防御医学講座　炎症病理学　上野正樹先生より「血液脳関門機能およびその障害の機序について」を講演していただいた。

その他、ランチョンセミナーより、岡山大学　市川智継先生、千葉県がんセンター　井内俊彦先生、国立がんセンター研究所　市村幸一先生、鹿児島大学　平野宏文先生、筑波大学　石川栄一先生、秋田大学　笹嶋寿郎先生に講演していただいた。シンポジウムとして「小児脳腫瘍の病理と分子解析」「グリオーマの病理と分子解析（１）」「グリオーマの病理と分子解析（２）」「脳腫瘍の新規治療と病理」を開催した。臨床病理検討会として４セクション、それぞれ２症例ずつ検討を行った。シンポジウム20演題、一般口演66演題、ポスター発表80演題、参加人数580名であった。

また、教育セミナーでは、群馬大学大学院医学研究科　信澤純人先生、群馬大学大学院医学研究科　伊古田勇人先生、東京大学大学院医学系研究科　柴原純二先生、藤田保健衛生大学　安倍雅人先生、東京大学医学部　武笠晃丈先生、仙台医療センター　鈴木博義先生、国立がん研究センター中央病院　吉田朗彦先生、九州大学大学院医学研究院　鈴木　論先生、虎の門病院　井下尚子先生、群馬大学大学院医学研究科　横尾英明先生、北海道大学大学院医学研究科　西原広史先生に講演を受け賜わり、脳神経外科専門医試験前のセミナーということもあり、238名の多くの先生に参加していただいた。それぞれのセクションは、最先端かつ内容も充実された発表とともに、事前に作成していただいたセミナーテキストもきれいな病理写真に加え、まとまった解析、まとめもあり、セミナー参加者には大変好評であった。本学会では、セミナー討論時間を少し長めに企画したこともあり、活発な討論を各セッションにおいて行っていただいた。また、臨床病理検討会では、ポスター会場での実際のスライドの設置に合わせてバーチャルスライドによる掲載を行い、活発な討論を行っていただいた。さらに「診断困難な症例」のセッションにおいてもあらかじめバーチャルスライドを作成し、一般口演ではあるが、スライドを会場の先生方にも体験していただきながら活発な討論を行っていただいた。

今回の学会のテーマは「形態と分子の融合」であり、分子生物学的解析に目を向けやすい状況ではあるが、臨床病理検討会のセッションでは、組織のほんの少しの形態の変化より診断にいたった症例も検討され、改めて形態の大切さを認識した学会であったと思われる。



今回から、讃樹會学会助成金事業において支援協力しました学会につき、開催報告を掲載します。

「創部ものがたり」

「ひばり」
（児童問題研究会）

―障碍児と遊ぶことで育ち合うボランティアクラブへの軌跡―

田中　宏実（平成元年卒・４期生）

某大学経済学部に入学後、目的を見失い５月病になった私がのめりこんだのは、学童期の知的障害児の放課後の遊びを援助するボランティア活動でした。毎回20～30人の知的障害のある小学生に対し、地域の高校生や大学生20～40人が集まって集団遊びをしました。その他、自閉症の小学生の家庭教師をしたり、夏の合宿を企画・参加したりするうちに、こうした障害児のためになる職業につきたいと考えるようになり、医学部を再受験しました。

入学後まず、初めに高松市の児童相談所を訪ね、障害児と遊ぶようなボランティア活動をしたいと考えている学生と名乗りました。若気の至りでしたが、温かく職員の方に応対していただき、ダウン症児親の会（子鳩会）と自閉症児親の会の代表者の御二人と面談を設定していただきました。御二方ともていねいにお話を聞いてくださいましたが、定期的な集まりはあるが、集団療育を行う予定はないということでした。

次に児童相談所の方から、長尾の東部養護学校教諭の小野暉子先生が参加している「ちびっこ教室」を紹介され、小野先生を訪ねました。毎月１回日曜日に香川大学教育学部特殊教育研究室（当時の名称）の１～３年生が20～30人参加しており、その組織力に圧倒されました。毎月１回日曜日のちびっこ教室に参加するために、直前の水曜日の夕方、高松市番町の研究室に

おひさま教室の卒園式にて

子どもと公園で遊んでいるところ

通いました。変な部外者にもかかわらず受け入れてくれた教育学部の学生の皆さんに感謝しています。

同好会を作るため、ロールシャッハの大家という心理学の高橋先生に顧問になっていただきました。サークル名の児童問題研究会は、先生の命名で、先生の真面目な人柄が表れています。もっと子どもらしい名前を別につけようとキャンパス周辺のかわいい小動物を考えて「ひばり」と決めました。大学病院ができる前で、医大坂の登り切った土地はただの空き地で、ひばりが春の大空高くピーチクパーチク舞い上がっていたのでした。数年後、高橋先生が退職された後は、精神科の細川先生が顧問を引き受けてくださいました。先生方は多忙であったこともあり、サークル活動にはノータッチでまかせてくれました。今思えば、交流をかねてミニレクチャーなどをお願いしたら良かったかなと思います。

同好会ができ勧誘を始めると、明るいカラーの学年と言われていた同期の４期生は、20数人部員として名前を登録してくれました。しかし兼部やバイトなどで皆忙しく、実働部員がほとんど私１人のこともあり、一時期は存亡の危機がありました。

５期生の平澤君が入部して彼が詳しかったカウンセ

リングやエンカウンターグループ（グループで行うカウンセリング活動）の知識、経験に驚かされましたが、子どもたちへの関わりには直接生かせなかったのが残念でした。今思えば、各メンバーの子どもとの関係性の振り返りに役立ったかもしれません。

毎月の「ちびっこ教室」の参加が少ない中、救ってくれたのが弓道部の創設者である３期生の黒瀬さんの入部でした。明るい人柄で教育学部の人とも打ち解け、同じ２期生の本田さんの入部もあり、年１回は「ひばり」がちびっこ教室を企画進行するようになりました。

大学祭では、地域の子どもたちに喜んでもらおうと、ふと思いついたチョコバナナ（バナナにチョコをコーティングしたもの）を売ったり、輪投げをしたりしました。文科系部としては、活動紹介の部誌や写真展示をすべきだったかもしれませんが、当時は写真もとっていないし、文章などの記録もなく、部誌は思いもよらないものでした。

そして３年ほどたった頃、大きな転機が訪れました。

高松平和病院小児科の中田先生から、障害児の集団療育「おひさま教室」を始めるために協力を打診されました。「ちびっこ教室」をどうするか、大きな決断を迫られましたが、「おひさま教室」はひばりの協力なしでは開始できないということで、「おひさま教室」を選びました。また、医療関係という点でも親近感があったと思います。「おひさま教室」では臨床心理士の方が毎回、こども一人ひとりの発達段階の評価とそれに合った働きかけ方を事前に説明してくれたので、かかわり方が明確でやりがいのあるものでした。それまで、発達心理学、障害児教育学、精神分析学などを独学で知る程度でしたが、知識が深まりました。

その後、入部してきた２代目部長の７期生角南くんの時代に、飛躍的な発展を遂げました。部誌の「翔（はばたき）」も、このとき創刊されました。彼らの世代は障碍児だけでなく保護者たちと深くかかわる新境地を切り開きました。家庭を訪問したり、飲み明かしたり、様々な交流を行いました。学生ならではの立場は、保護者も本音を言いやすかったり、厳しい突っ込みもあったりで、子どもとその家庭を理解し、人間形成において大きなものがあったようです。

障碍（しょうがい）のある子どもと触れ合うと、ひとつのカルチャーショックを受けることになります。子どもを理解しようと努力したり、自分の無力さを感じたり、子どもの変化や笑顔に驚きや喜びをもらったり、今までにない経験をすることが多いです。子どもに癒されたり、喜んでもらえて感動したり、相手を思いやる感性が育てられるようなところもあります。ひばりに参加する学生はそれぞれに子どもたちと喜び合い、育ちあうのです。さらにこどもたちのきょうだいや保護者や部員どうしから多くを学んでほしいと思っています。

2015年11月１日私にとっては初めてのひばりのOB会がありました。幹事となった９期生の串田君（平成６年卒。香川大学附属病院病理部）の尽力もあり、大盛況でした。OBの中にはひばりでの経験が、小児科でなくても診療に役立つことがあったり、親となって子育てするときに生かされたといった声もあり、うれしく思いました。自分自身も親として、また小児科医としての日々の診療に役立っていると思います。

ひばりOB会
前列（５人のうち）左から２番目が筆者　４番目が田辺さん
中列（５人のうち）左から１番目が角南くん
後列（５人のうち）左から２番目が串田くん

その後、良い後輩に恵まれ「ひばり」が今も元気に羽ばたいている（活動している）ことは本当に喜びにたえません。今後、ますますの発展を祈念しています。

支部会・懇親会

香川医科大学平成６年卒同窓会の開催報告

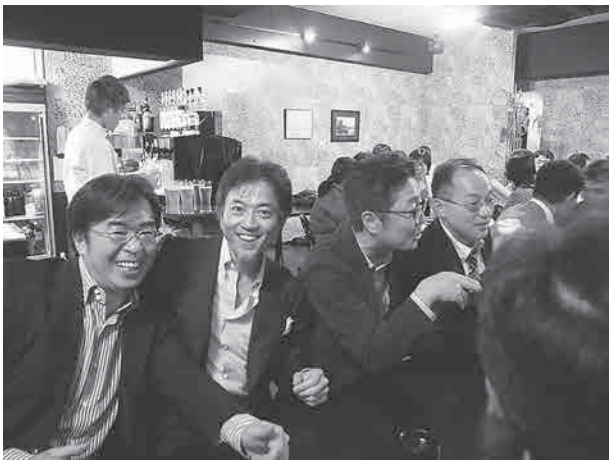
串田　吉生（平成６年卒）

平成27年８月29日（土）ホテルクレメント高松で香川医科大学平成６年卒同窓会が開催されました。卒業以来我々の学年の同窓会は行われておらず、卒後20年目に同窓会を開こうという話があったのですが、私の不手際でずっと延び延びになっていました。結局卒後20年目が過ぎ21年目を迎えてしまった頃、平成７年卒も20年目の同窓会を開催すると聞き、平成６年卒の同窓会もここでしなければ実現しないまま流れてしまうと思ったことと、入学時は同学年で苦楽を共にした平成７年卒の人も大勢いるので、同日開催ができればという思いで浅賀君とともに急遽準備を進めました。平成７年卒の幹事の福田（劉）さんと相談しながら、会場は平成７年卒とは別室ですが合流できるよう同じホテルクレメント高松で行い、二次会は平成７年卒と合同で行うこととなりました。

当日、遠方（関東から九州まで）からの出席者も多く、10年や20年以上会っていない人も多い中、ほとんどの人がお互いに一目見て誰かすぐに分かっている様子で、会場についた瞬間から「久しぶり～。○○全然変わっとらんな～。」などのうれしい興奮したような声が飛び交っていました。（特に女性は１オクターブ上がっているように感じました。）

一次会は加地君の司会で、一人一人の近況報告などを含め和やかに盛り上がりながら会は進みました。途中から平成７年卒の同期も合流し、一層盛り上がりました。みんないい年になってそれぞれの立場で活躍し、内面も成長していると思うのですが、この時ばかりはみんな学生の時とほとんど変わらず、学生時代に戻ったような感じでした。仕事など普段ではお互いタメ口になることは少ないと思うのですが、この時はみんなタメ口で、やはり同期はいいなと感じました。

二次会はほとんど福田（劉）さんがセッティングしてくれ、二学年合同で60名を超える盛大な会となりました。学年が１つ違うだけなので、知っている人も多く、サークルなどで繋がっている人達もいたので、これも大変いい会になったと思います。一次会、二次会とも楽しく充実しすぎて時間があっという間に過ぎてしまい、話も尽きませんでした。中にはもっとゆっくり話がしたかったのに十分に話せずじまいだった人もおり、もっと時間が過ぎるのがゆっくりであればといいのにと思ってしまう程、大変濃密な時間でした。同窓会当日および後日に「本当に良かった。また是非しよう。」といった声やメールが大勢からあり、また節目の年に再会したいと思っています。また、連絡が急になってしまったため日程が合わず残念ながら出席できなかった方々にはお詫び申し上げます。次の機会には是非お会いしましょう。



最後に、讃樹曾事務局の柚山さんには案内状の発送などを含め大変お世話になりました。この紙面をお借りして柚山さんと福田（劉）さんに厚く御礼申し上げます。

（左から）
最後列：冨松拓治、植木昭彦、吉田篤史、石村健、榎本祥太郎
三列目：串田吉生、島村隆浩、浅賀健彦、福原政作、角岡潔、内田有彦、近藤昭宏、直江伸行、宮崎達也
二列目：河田（中嶌）眞由美、加地良雄、志水英明、大山英郎、奥谷雄一、松尾寛、小林英治、木下（佐藤）晶、吉田（村上）綾、河北賢哉
最前列：武田（岡本）早苗、柳田（前田）亜美、齊藤律子、後藤理恵子、大江秀美、大野（大石）晶子、三谷（今井）琴絵、冨田（阪本）紀子、先山（蔡）由喜

10期生卒後20周年同窓会

福田（劉）有子（平成７年卒）

「キャシャーンがやらねば、誰がやる？」

アニメ人造人間キャシャーンの冒頭のセリフのように、リュウがやらねば、誰がやる10期生卒後20年同窓会、幹事の福田（劉）有子です。最近のマイブームが同窓会幹事で、2015年８月29日香川医科大学10期生、卒後20年を祝う会を無事盛大に開催することができました。

ちょうど３年前の夏、香川でプチ同窓会をしたとき、同じsmall group（SG）で、基礎医学実験パートナーだった横井英人さんが、母校医療情報部の教授に就任したときました。先輩方は同期教授就任の際、同期によるお祝い会をしているのをFacebookで拝見し、横井さん教授就任を知ったのがずいぶんあとで、のびのびになっていた教授就任を祝う会も一緒にしたいと思い、無事その任務も今回果たすことができました。

10期生卒業生すべての方と平成元年入学の方にできる限り連絡をして、宛先人不明で名簿でたどり着けなかった方は、名前と専門分野を頼りに検索し、一次会参加者総勢50名がJRクレメント高松に一堂会しました。

“朋あり遠方より来る、また楽しからずや”

北は関東地区から南は鹿児島からの参加。人生最高の楽しみの一つの同窓会、４日前に台風15号が四国地方にも近づくも、無事避けることができ、20年ぶりもしくは10年ぶり（前回の同窓会から）にあう同期。もうそろそろbig changeな方続出かしらと予想していましたが、意外にみなさんsmall change、話をしたらほとんどno change。昔話に花がさき、各々の近況報告会では笑いすぎてお腹が痛かったです。

同窓会前に大学病院内で９期生同窓会幹事の串田先生に病理のことで伺った際、９期生も同日に同窓会をするのだよときき、それならば二次会を一緒にしませんかというので決まった、２学年合同同窓会二次会。多くの人数を収容できる二次会場所手配は、当日では無理なので、７月下旬、事前になれない夜の古馬場を彷徨いながら、ナンパの魔の手をくぐりぬけ（適切な二次会会場を、キョロキョロ探す熟女が、迷える子羊のようにみえたのか）、BBハウスという60人（10期生38名、９期生22名）収容可のいいお店にたどりつきました。二次会では懐かしい先輩方にもあえ、楽しさ倍増。三次会のあとの、しめの四次会は、お約束の五右衛門にて生醤油うどん、ぶっかけうどん、カレーうどんに舌つづみ～熱い晩夏の高松ナイトでした。

10年毎だと住所変更の為連絡がとりにくく、みんなと元気で再会したいので、次回は2020年夏、卒後25周年を祝う会で高松に集まりませんか？ 10期生関連の方で、今回来られなかった方や、幹事の連絡不十分で今この紙面で同窓会のことを知った方、当日の模様を写真で見ることができるようにしていますので、香川大学医学部放射線科福田有子宛かメールでfukuyu@med.kagawa-u.ac.jpまで、ご一報ください。本人確認ができるようになぞなぞをだしますので、よろしくです。

次回ぜひ“わがかがわ”で会いましょう。

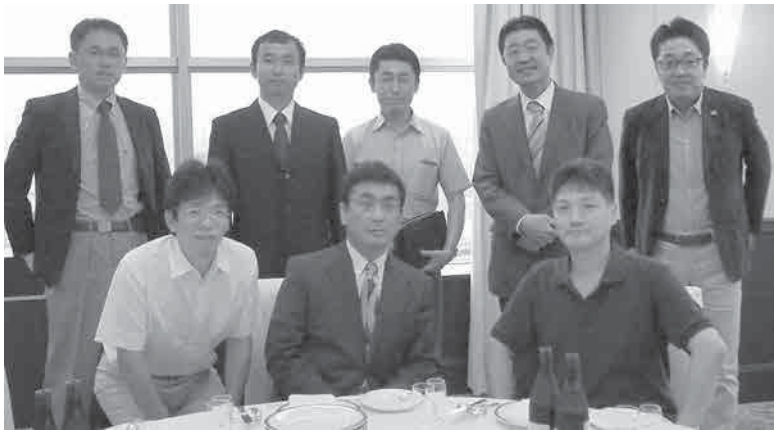
いろいろ助言、協力していただいた、幹事の中村さん、小野さん、井町さん、讃樹會さんありがとうございました。

一次会集合写真

10期生同窓会　一次会

上段：真栄里、遠藤、田中、山田、蓮池、磯部、井町
下段：三ツ矢、松本、古川　（旧性表示・敬称略）

高尾さん音頭による　祝杯



上段　溝口、水谷、　横井、宮崎、榎本
下段　植木、吉田、直江　（敬称略）

左より大塚、小笠原、李、高尾、
佐藤、岩永　（敬称略、旧姓）

９期生・10期生合同同窓会二次会　at BB ハウス
左より海老沢、川田、加藤、川添、勝浦、田中
（旧性表示・敬称略）

横井教授就任（６周年）同期で祝う会
左より　横井医療情報部教授、劉

香川医科大学２期生同窓会（昭和56年入学・昭和62年卒業）

今西　治（昭和62年卒・２期生）

香川医科大学２期生の同窓会を平成27年11月１日に、ザ・リッツ・カールトン大阪で開催しました。２期生は卒業後に香川を離れた者も多く、今回は交通の便の良い大阪での開催となりました。その甲斐あってか遠方からも多数参加があり、また転居や転勤に伴い連絡先不明となっていた何人かの先生にもぎりぎりで何とか連絡がつき、最終的に卒業生38名の参加となりました。さらに来賓として関西在住の恩師の先生方の中から小栗顕二先生（麻酔科学）、島田眞久先生（解剖学）、宮内昭先生（第２外科学）の３名の先生にご出席いただきました。

さて会の様子ですが、幹事代表及び来賓代表の挨拶の後、最遠方から参加の菅田先生（小樽市）の乾杯の発声で和やかに始まりました。しかしそこは同期での同窓会です。多＞少容姿や頭髪に変化はあるものの気持ちはすぐに学生時代にタイムスリップし、学生時代の思い出から近況報告まで話は尽きず、あっという間に時間が過ぎていきました。次回は２年後に卒後30周年記念会として東京で開催予定です。次回代表幹事の近藤先生の挨拶で締めくくり、再会を誓ってお開きとなりました。

※今回、住所録の確認から当時の大学章の捜索まで讃樹會事務局に大変お世話になりました。この場をお借りしてお礼を申し上げます。

最後列　井上清 合田文則 泉佳成 野瀬道宏 森泰胤 川上公宏 島田健永 猪尾昌之 山本修平 田坂大像 山田節子 國土泰孝 吉鷹秀範
３列目　藤田憲弘 石橋秀昭 伊藤正裕 近藤昌敏 松田信二 植木正明 大坪秀樹 菅田忠夫 吉川善人 木林和彦
２列目　山岸善文 谷向茂厚 桑原宏子 近藤（高橋）真弓 田中（馬渡）恭子 佐々木敏江 佐田玲子 相良（山根）雅子 影山淳一 内田光一
最前列　柳川真理子 岸本典子 今西治 来賓島田眞久先生 来賓小栗顕二先生 来賓宮内昭先生 磯篤典 松坂憲一

７年ぶりに讃樹會沖縄県支部会開かれる

医療法人以和貴会西崎病院　副院長・脳神経外科
國吉　　毅（昭和61年卒・準硬式野球部）

讃樹會会員の皆様如何お過ごしでしょうか。一期生（昭和61年卒）の國吉です。７年程前の会報に報告しましたが、平成20年11月に、第１回目の沖縄県支部会を開催して以来、支部長である私の怠慢により７年間にわたり支部会を開くことができませんでした。支部会員の方々には、大変お待たせした事を、この場をお借りしてお詫び申し上げます。また、同窓生の松下正之先生（平成３年卒、バドミントン）が、琉球大学医学部分子・細胞生理学講座教授として沖縄に赴任された際も、琉球大学医学部長に就任された際も、同窓生として何のご挨拶もできませんでした。今回意を決して、松下先生と初めて面談して、これを機会に支部会を活性化させようと、今回の第２回沖縄県支部会兼年末懇親会を企画した次第です。

今回久しぶりに、支部会を開催するにあたり、沖縄県在住の讃樹會会員の動向を調べたところ７年間の間に、県外へ引っ越したり、県内でも勤務地の移動があったりして、所在の確認に、やや時間を要しました。不確定な情報もありましたが、22名程が県内に在住している事が判明し、内所在が明らかな18名に案内状を送り、10名の方々より出席のご返事を頂きました。

さて、支部会当日の平成27年12月９日、会場は、那覇市内にある季節炉端おもろまち商店というお店です。今回の参加者は、私と、同期の岩佐鋼三先生（Ｓ61卒、硬式テニス）、松下正之先生（Ｈ３卒、バドミントン）、仲里信彦先生（Ｈ４卒、空手）、石川雅士先生（Ｈ４卒、弓道）、城間丈二先生（H11卒、バドミントン・ODSC）、野々村秀明先生（H13卒、馬術・農業）、普久原朝史先生（H21卒、スキー）と、急用で参加できなかった２名を除いて計８名でした。会は、あんこう鍋をつつきながらのざっくばらんな雰囲気の中、参加者に、自身のプロフィールを含めて順番に挨拶して頂きました。お互い初対面の方もありましたが、すぐに打ち解けて、懇親の輪が広がっていきました。２時間半程の楽しいひと時を過ごした後一旦お開きとしました。その後私を含めて５名程で近くのバーでの２次会へと場所を移し、しばらく歓談の時を過ごしました。

今回久しぶりに、支部会を開催して感じた事は、現在は、母校を離れてそれぞれの立場で日々を過ごしていますが、少なくとも青春時代の貴重な６年間を、池戸の丘の学舎で過ごし、共有できる思いを持っている者同士が、このように定期的に集まる事は、とても有意義であるという事でした。これは、年齢は違えど同窓生ならではの感覚ではないかと思いました。今後とも支部会としての活動は着実に継続していきたいと考えています。また、香川とは、地理的には、遠距離にありますが、これからも母校及び讃樹會のますますの発展を祈りながら、精進していきたいと思っています。

前列向かって右側より　仲里信彦、國吉毅、岩佐鋼三、
後列向かって右側より　石川雅士、野々村秀明、松下正之、普久原朝史、城間丈二の各支部会員

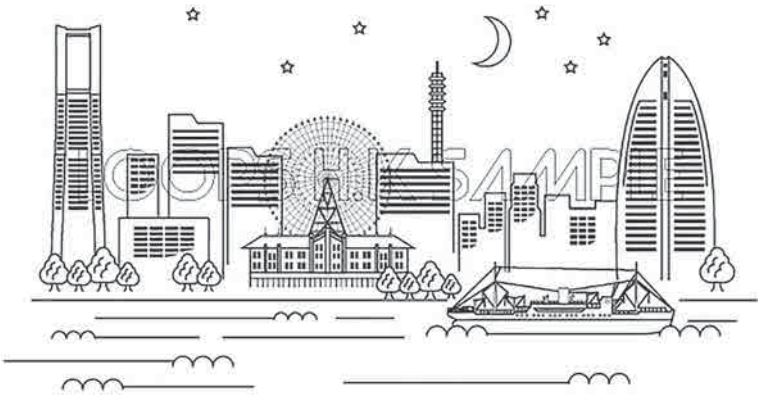
第14回関東支部会開催報告

関東支部会会長より

横浜市立みなと赤十字病院　臨床試験支援センター長　伊藤　理（昭和63年卒）

2015年11月29日に第14回関東支部会を東日本拡大記念会として、無事開催できました。詳細な報告は今回、５期生の松原桃子先生にお願いしました。「ほっとコーラ・・・」の著書で有名な先生は、私の母校茨城県立土浦一高の後輩でもあります。面白い報告となることを期待します。

次回は2016年11月27日に同会場で15周年記念会を開催します。今回も神戸や岡山から参加があり、地域限定しないで行こう、という意見が多数ありました。全日本拡大記念会として参加をお待ちしています。



第14回関東支部会同窓会に参加して

松原（白土）桃子（Ｈ２年卒）

平成27年11月29日、晴天で穏やかな気持ちのいい日に横浜で第14回関東支部会（東日本拡大記念会）が盛大に開催されました。支部会長の第３期生の伊藤理先生ご夫妻のご尽力で、昨年、一昨年に続いて老舗のニューグランドホテルの最上階で開かれました。透き通った青空と横浜港を眺めながら、青春時代を過ごした懐かしい香川の友人、先輩、後輩たちとの再会は最高のシチュエーションでした。

今回は東日本拡大記念会ということで、仙台からは清元秀泰先生（３期生）、名古屋から中村恭介先生（５期生）、神戸から山田勇先生（６期生）、岡山から山田治栄（５期生）の参加があり、東日本を超えて大拡大版になりました。

司会は突然の指名にも関わらず、清元先生が軽快で流暢な関西弁で進行してくれたので、終始とても楽しい雰囲気でした。相変わらず清元先生の存在感とパワーはすごいです。清元先生のおかげで緊張するはずの一人ずつの自己紹介も和気藹々とずっと笑いが絶えませんでした。ゲストで周産期学のパイオニアである神保利治先生もお元気そうで全くお変わりなく嬉しく思いました。

今回の参加者は34名で全員と話すことはできませんでしたが、今まで話したことがなかった先生方とも、香川出身ということだけですぐに打ち解けて交流を深めることができました。井上由実先生（３期生）は目がぱっちりでとても可愛くてアイドルのようでした。木林和彦先生（２期生）は女子医大の教授なのに気さくでユーモアたっぷり。尾島博先生（１期生）は品川で開業されており人生経験もいろいろと豊富で相談役でした。小出隆司先生（５期生）はあの時のまま、いるだけで面白かったです。設楽（三ツ矢）万里子先生（10期生）とは女医の苦労を語り合いました。

一次会の後は、赤沼真夫先生（６期生）の企画で二次会、三次会と・・。三次会はお洒落なバーだったのに酔っ払い集団が大声で下品なことばかり・・。デート中の皆様にはご迷惑おかけしました。次の日が月曜

Gest神保利春先生／（S61）尾島博／（S62）伊藤正裕、木林和彦、近藤昌敏、松田信二／（S63）伊藤理、清元秀泰、井上由実、佐々木豊明、田中淳一、山田賢治／（H２）小出隆司、中村恭介、松原桃子、緑川剛、山田治来／（H３）赤沼真夫、野村直人、丸山雄一郎、山田勇／（H４）入江琢也、杉田礼典／（H６）伊藤美奈子／（H７）清岡崇彦、設楽万里子／（H13）丸山康世／（H14）幾世橋佳、林省吾、平井宗一／（H16）白井隆之、田中毅／（H18）佐藤りえ／（H22）稲垣小百合

【注：参加者氏名は卒年順で、写真順ではありません。】

日でなければ時間を忘れてもっと飲んでいたことでしょう。

私は今回の会は参加するかどうか直前まで悩んでいました。世田谷区下北沢で乳癌検診・子宮癌検診を主にした女性検診クリニックを開業して６年になりましたが、ありがたいことですが年々患者さんも増え、順調に仕事をしています。しかし９月末の北斗晶さんの乳癌の報道後、突然、２倍から３倍の仕事量で、スタッフも増やす暇もなく休日返上で働き続けていたので疲労困憊していたのです。マスコミの力や芸能人の与える影響力はすごいですね。電話での問い合わせも多く、電話がつながらず患者さんに叱られたり、faxやメールの返信をするのも結構大変な作業でした。久しぶりに懐かしい仲間と会うのに、美容院にも行けず、服を買う暇もありませんでした。

でも迷った結果、参加させて頂いて本当によかったです。開業の先輩、大学で研究している人、子育てしながら仕事と家庭を両立している女医さん、独身貴族でモテモテ（？）の人などからいろいろな話が聞けて、大変参考になりました。他科やそれぞれの専門の先生にも最新の情報を交換できたことも有意義でした。これからの診療にも役立てていきたいと思います。大学の同窓会は不思議なもので、あの三木町のあの場所で学んだという共通点だけで、自分を飾ることなく心を許して素に戻れる力があるようです。香川を卒業して他大学の医局や医師会でたくさんの先生達とお会いしましたが、香川大学の人達は、強烈な個性と特別のパワーを持った人たちの集まりなんだとしみじみと実感しました。また来年もより多くの同窓の皆様に参加して頂いて、交流できるのを楽しみにしております。

学生ACLS勉強会　活動報告

香川大学医学部　学生ACLS勉強会
代表　医学科４年　中谷　元

学生ACLS勉強会（Advanced Cardiovascular Life Support）では、救急救命センター黒田泰弘先生の御指導のもと、地域医療教育支援センター松原修司先生監修のスキルスラボを活用させていただき活動しています。“目の前で大切な人が倒れたとき何ができますか”というテーマをかかげ、学内だけではなく、外部イベントにも参加させていただき、協力して勉強しています。

BLS/AED講習会とボランティア活動

BLS（Basic Life Support）およびAED（Automated External Defibrillator）講習会を開き、リトルアンや練習用AEDを用いて、実際に体を動かして、体のかたさや胸骨圧迫を約10分間続けることの難しさを感じてもらっています。僕たち自身も講習会を行なわせていただく中で、気づく疑問点も多く、充実した時間が得られました。今年度は丸亀町商店街にて、毎年恒例の歩行者を対象とした講習会。さらに、香川大学・徳島文理大学・保健医療大学と３大学連携イベントで各大学の学祭にてBLS/AED講習会を行ないました。

全国医学生CPR選手権大会

日本救急医学会によって企画された、今年を第１回目とする通称“CPR甲子園”（CardioPulmonary Resuscitation）が行なわれました。大会では、胸骨圧迫と換気の正確さが機械によって測定され、点数を競い合いました。僕たちは広島・呉共済で行なわれた中国・四国ブロック予選に参加し、全国大会の出場こそは逃しましたが、他大学の学生や先生方と交流を深めることができました。ぜひ来年度はリベンジを果たしたいと考えています。

第１回CPR甲子園に参加し、山村さんが個人で第２位に

香川大学医学部　学生ICLS講習会

香川大学の医学部学生を対象とした学生ICLS講習会（Immediate Cardiac Life Support）を６月及び11月に行ないました。11月の講習会では、この講習会が始まってから20回目という節目を迎え、多くの１年生が参加してくれました。今年度の活動期間中である2015年10月、AHAガイドライン2015（American Heart Association）が発表され、変更点も踏まえつつ充実した講習会を行なえました。新しいガイドラインでは、どのような方法が伝わりやすいかを常に意識し、偶然その場に居合わせた地域の方々こそが、救命の連鎖をつなぐために重要であるということを伝えています。

香川大学医学部医学科讃樹會をはじめ、多くの方々に支えられて今年後も活動を終えることができました。ご支援ありがとうございました。

美術館北通り診療所の瀬尾憲正先生と丸亀町の歩行者天国（９月20日開催）にて、AED講習会を実施
写真左から　山村さん、瀬尾先生、中谷

第36回香川大学医学部祭を終えて

第36回香川大学医学部祭実行委員長
医学科４年　佐藤　雄大

オープニング

第36回医学部祭実行委員長を務めました医学科４年の佐藤です。今年度も10月９日から11日の３日間無事医学部祭を行うことができました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

医学部祭の運営は医学科４年生、看護学科３年生を中心に行っており、今年度も総勢77名の有志が医学部祭実行委員に名乗りをあげてくれました。このような大人数の実行委員の長となり、まとめて行く経験を学生時代にできたことにより自分自身大きく成長できたのではないかと感じます。現在の医学部祭実行委員の制度では、医学科の３年生が副実行委員長を行い、同じ人が翌年の実行委員長を務めるということになっていますが、副実行委員長の募集があった際、私自身は全くこの役職に興味がありませんでした。なぜ副実行委員長になったかと申しますと、当時の実行委員長で部活の先輩であった西さんから猛烈な勧誘を受け、断りきれなかったからです。しかしながら、それから２年間医学部祭を通じて出会うことのできた方々や、重ねることができた経験の大きさを考えると、今では西先輩に心から感謝しています。

さて、今年度医学部祭で私たちが掲げたメインテーマは「破天荒」でした。破天荒とは本来、豪快で大胆な様子ではなく、前人のなし得なかったことを初めて行うことを表す言葉です。今回の医学部祭は、過去の先輩方が築き上げたものに加え、さらに新しい試みに取り組んで行きたいという実行委員の思いを“破天荒”に託しました。

このテーマを実現するために、各企画について例年とは違った試みを行いました。まず、医学展では伝統である３大学連携企画として徳島文理大学・県立保健医療大学の方々と協力しての展示はそのままに、例年の模造紙を使った展示スペースを減らし、体験型の展示スペースを増やすことで来場者の印象に残る医学展を目指し、複数個所に分かれていた展示スペースを大きな教室に集約することで、一度に多くの展示物を見ていただけるようにしました。また、日本骨髄バンク宣伝員の方と協力し医学展に外部ブースを設置しました。数年前の医学部祭のアーティストライブ中に体育館の床が抜けてしまって以降、催されることの無かったアーティストライブも今年度より復活させることができました。広告活動につきましても、ホームページやポスターに加えてTwitter等のSNSによる広告を始めました。今年度の学祭に、例年以上に多くの来場者にお越しいただけたのも、こうした時代に沿った新たな試みによるものと自負しております。

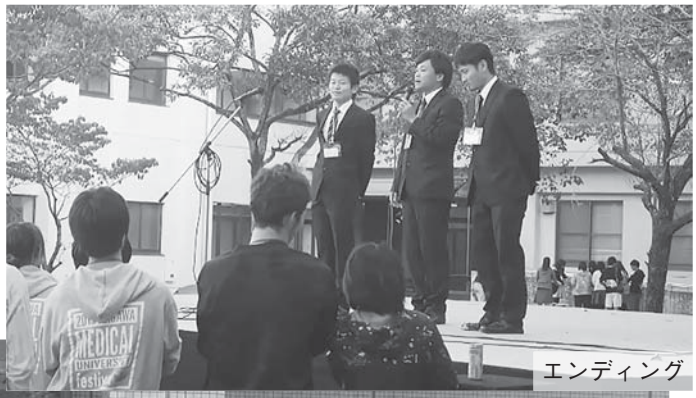
医学展

プラザステージ企画

AED講習会

一方で新しい試みによる問題も生じました。医学展では体験型の展示物を多くしたことによる学術的な展示の減少、広告ではでは情報の電子化によりお年寄りに情報が届き難くなったことなどです。また医学部祭の運営面では、平成29年度から授業カリキュラムの変更により例年医学部祭運営の主軸であった医学科４年生が運営に従事できなくなるといった問題も浮上してきました。現在は、今年度の反省を踏まえ来年度の医学部祭実行委員長と来年度以降の医学部祭に向けて話し合いを行っている最中です。

最後になりましたが、一学部祭としてこれほどまでに規模の大きな香川大学医学部祭を開催することができましたのは、讃樹會や医師会の方々、香川大学医学部の教職員の方々、学務室の方々、スポンサーの方々、そして実行委員のみんなのご協力の賜物と改めて厚くお礼申し上げます。来年度以降も香川大学医学部祭の運営に関しましてはご指導・ご鞭撻の程よろしくお願いいたします。


エンディング

香川大学医学部祭実行委員

編集後記

皆様、新しい年がスタートして、いかがお過ごしでしょうか？暖かいお正月かと思えばその後に大寒波が日本列島に到来し、今年は同窓会会長選挙もあり何かいい意味で激動の１年を感じずにはおれません。一昨年は南病棟、昨年は手術棟が完成し香川大学医学部も着実に新しいステージに進んでいることと思います。今年は、大学そして同窓ともに飛躍の年になればと祈念しております。

さて、皆様方のおかげで会報第51号を発刊することができました。心より御礼申し上げます。本号は、同窓生の荻田和秀先生に寄稿していただきました。皆様ご存知かもしれませんが、荻田先生は昨年ドラマ化されました医療マンガ「コウノドリ」の原作での主人公のモデルとして、ドラマの方でも医学監修としてご活躍されています。荻田先生は、今年開催されます讃樹會総会でご講演いただき、その後、記念ライブ演奏をご披露いただけることになっております。荻田先生のご高配に感謝申し上げます。

本号は支部会・懇親会報告もたくさんご寄稿いただきました。研究助成金および奨励金、国外留学助成金を受賞された先生方のご活躍を祈念したいと存じます。その他、盛りだくさんの内容でお届けすることができました。本号にご寄稿いただきました先生方、学生さんに感謝申し上げます。

私事ですが、新年度より広報局長が交代となります。至らぬところが多々あったかと思いますが、皆様のおかげで第44号より本51号まで４年間務めることができました。この場を借りて御礼申し上げます。そして私を支えていただきました事務局の柚山稲子様に心より感謝申し上げます。前号の第50号記念号で記念特集を寄稿できたことも、大変嬉しく思っております。今後も別な形で同窓会の発展にお手伝いできればと思っております。

同窓会会報のさらなる充実のため、今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。最後に同窓の皆様方のご活躍とご健康を心より祈念申し上げます。

平成28年１月　讃樹會広報局長　中村丈洋（平成７年卒）

事務局からのお知らせ

【連絡・問合せ先】
TEL　087－840－2291
E-mail dousou@med.kagawa-u.ac.jp

◆総会返信はがきの締切は３月末日です。
会長選挙・理事選挙の投票は５月25日までです。忘れずに返信下さい。

◆医師賠償責任保険を年間を通じて受け付けています。
（途中加入ができます。）
勤務先病院の異動などで保険が切れる等のご心配のある場合も、ご連絡いただければすぐに対応します。

◆同窓会、懇親会を開催する際には、10人以上集まると一人3000円の支援がありますので是非ご利用下さい。

◆国外留学助成金の申込は年２回です。直近の締切は本年３月末日です。次は９月末日となります。

◆学術助成金の申込締切は毎年４月末日です。ふるってご応募下さい。

讃樹會定期総会　平成28年 5月28日(土)

卒年　　氏名

14：30	総会 《臨床講義棟１階》	出席	欠席
15：00	記念講演会＆ミニライブ 講師：荻田和秀先生 ミニライブ：荻田和秀ピアノトリオ 《臨床講義棟２階》	出席	欠席
18：00	懇親会 《ホテルクレメント高松》	出席	欠席
20：00	２次会 《SPEAK LOW》塩屋町　先着50名	出席	欠席
	２次会で演奏　※当日入れてください。 □ボーカル　□演奏 （楽器名：　　）	希望	

※同窓会・懇親会の出席・欠席等ご連絡ください。

連絡・問合せ先／讃樹會事務局
TEL：087-840-2291　月～金　10：00～17：00
E-mail：dousou@med.kagawa-u.ac.jp

返信締切　３月末日

出欠をお知らせ下さい。

診療科だより　香川大学医学部附属病院　病理診断科・病理部

副部長（講師）　串田　吉生
（平成６年卒）

同窓会の先生方におかれましては平素より大変お世話になっております。

今回は香川大学医学部附属病院病理診断科・病理部についてご紹介させていただきます。香川大学医学部附属病院病理部は平成11年に訓令化され、専任の病理医が配置されました。さらに平成25年に病理診断科が標榜され、病理診断科・病理部となりました。現在、羽場礼次病院教授以下、講師１名、助教１名、病院助教２名、医員４名の医師８名、臨床検査技師７名、実験助手１名、事務職員１名、大学院生１名のスタッフより構成され、診療、教育、研究などの業務を行っています。

日常の主な診療業務として組織診断、細胞診断、術中迅速診断を行っています。これらの検体は全ての診療科より提出され、その領域は全臓器に及びます。特に近年、医学や医療の進歩により、患者さんの診断や治療のため我々に求められる内容は高度化し増加の一途をたどっています。例えば、免疫組織化学や分子生物学、分子標的治療などの進歩により乳癌や胃癌のHER-2、肺腺癌のEGFRやALKなどのコンパニオン診断が治療の選択のために必要になっています。また、免疫染色において診断に有用な新規の抗体がほぼ全臓器にわたり次々と報告されており、抗体の種類は膨大となっています。我々は限られた人員の中で可能な限り医学や医療技術の進歩に遅れることなく、各診療科の要求に応え患者さんの利益に通じる病理診断を行えるよう日々邁進しております。

当科では以前から各診療科との合同カンファレンス（現在では呼吸器、消化器、泌尿器科、婦人科、脳腫瘍、口腔外科、乳腺、腎生検、腎移植など）を定期的に行っており、さらに全ての診療科に対して問題となる症例がある時は病理部内で適宜画像や組織を供覧しながら検討しています。各診療科の先生方や医療スタッフと密にコミュニケーションをとることは、業務の円滑化やリスクマネージメントにも役立っています。

また、気管支鏡や超音波内視鏡下穿刺吸引（EUS-FNA）のon site cytology（ベッドサイド細胞診）を行っています。検査の最中に検体が確実に採取されているかどうか素早く判断することによって、患者さんの負担の軽減と診断率の向上に大きく貢献しています。さらに、肺癌についてはEGFRなどの遺伝子変異の検索が欠かせなくなっていますが、気管支鏡のon site cytology は遺伝子診断用の検体の適否の判断にも貢献しています。

現在、香川大学医学部附属病院では病院再開発が進んでおり、2016年１月から新手術棟が稼働します。今まで術中迅速診断は術者に電話で報告していましたが、新手術棟の稼働に伴い病理診断科・病理部の顕微鏡で我々がみている画像を手術室のモニターに映し出すことが可能になります。術中迅速で提出された組織像や細胞像を術者と供覧することによって、術者が実際の組織や細胞をイメージでき、特に微妙な診断の場合、病理医が口頭では表現しきれないような細かな所見やニュアンスが正確に伝わり、スムーズにディスカッションできることが期待されます。

全国的に病理医を志す者が少なく、特に地方では病理の入局者が何年もいないという県が少なくありません。当科では当初病理医は３名でしたが、ありがたいことに地方大学としては珍しくほぼ毎年入局者に恵まれ、絶滅危惧種？である病理医の育成に精一杯力を注いでいます。また、現時点では残念ながら５年生のポリクリに病理診断科・病理部は含まれておりませんが、６年生のスーパーポリクリや初期臨床研修(選択制)にも尽力を惜しまず教育指導を行っています。病理診断は全診療科に関係しているので、学生や研修医が将来どの科へ進もうと病理診断科での研修を役立ててもらえるように努力しています。

今後もさらに魅力的で信頼される診療科となるように精進して参りたいと存じます。同窓会の先生方におかれましても、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。